

42362

教科書文庫

4
8/0
42-1938
200030 1517

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

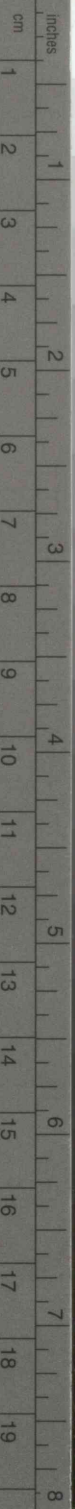


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ig1
資料室



新編女子國語讀本

改訂版

卷七



資料室

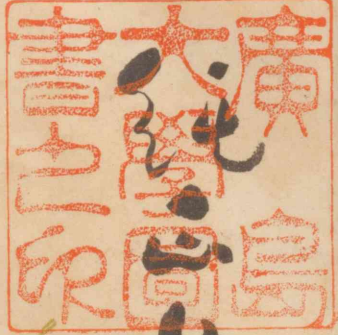
3759

昭和三十三年二月五日

文部省検定済

高等女子学校國語科用

Ig 1



又學部士子力編

女子國語



早稲田書局出版



(照參念紀大ニの教倫)

ーペア・ータスノミトスエ

エストミンスタキ・アペー
 陪である。遠く十一世紀の昔エドワード・ザ・コン
 フォサ王の建立に始り、次第に増築改造された
 もので、ピクトリア街に面して立つてゐる。その大
 塔は高さ七十五メートル、ゴシックの建築で、一七
 四〇年に出来たものである。カリヤム王以来、代々
 國王の戴冠式場となり、王、王族、及び國家に功勞
 のあつた政治家、詩人などが、特に選ばれてこゝに
 葬られることになつてゐる。政治家として兩度、
 ト、フオックス、バリアーミンなどが葬られ、
 有名なホイエック、コナーにはチョーサー、スレン
 サ以下チニスンに至る古來の詩人文豪が眠つてゐ
 る。

卷七 目次

一	國語の愛護	その一	編者	一
二	國語の愛護	その二	編者	七
三	國語の愛護	その三	編者	一六
四	吉野山		吉田絃二郎	二一
五	朽ちぬ形見		(源平盛衰記)	三一
六	カナダ・ロッキーの思出		槇有恆	三五
七	日野山の閑居		鴨長明	三九

目次

八 蓮を見る辭
 九 狂歌八首(狂歌)
 一〇 初夏の鹽原
 一一 五重塔
 一二 塔影(詩)
 一三 織田信長論
 一四 古今集より(歌)
 一五 船旅
 一六 阿波鳴門
 一七 親心

橘千蔭 四五
 尾崎紅葉 四九
 幸田露伴 五五
 河井醉茗 六三
 中村孝也 六六
 (十三歌人) 七一
 紀貫之 七五
 近松半二 八二
 西田幾多郎 八八

一八 音に聞ゆる爲朝
 一九 才藝
 二〇 國民の覺悟
 二一 芳流閣
 二二 心機一轉
 二三 競が事
 二四 秋に動く歌ごころ
 二五 ロンドンの二大記念
 二六 都市美論

(保元物語) 九九
 (十訓抄) 一〇六
 大西祝 一〇七
 瀧澤馬琴 一二二
 芥川龍之介 一二九
 (平家物語) 一三八
 尾上柴舟 一三八
 高田早苗 一四六
 佐藤功一 一五二

純正女子國語讀本 卷七

一 國語の愛護 その一

こゝに獨立した一つの國があつて、その國をそのまゝ維持して
 行き、或は更に進んで一層立派なものに仕上げて行くについて、國
 民の愛護せねばならぬものが澤山あるであらう。まづ第一に國
 體といふものがある。次には國民が祖先から傳へられた淳風美
 俗といふものがある。それから建築、繪畫、彫刻、その他の古藝術な
 ど、いろいろあるであらうが、我々が先祖から受け傳へて、思想傳達
 の機關として調法してゐる國語といふものも、國民の愛護しなけ
 ればならぬ最も大切なるものの一つであらう。抑も國の言葉と

淳風美俗

口體

どういふ風
 言葉だか
 現存は
 ない
 状態



國語はその國の文野の程度を示すものである。また國の過去、現在、未來を示すもので、或程度まで國運の消長を支配し暗示するといふことも出来る。

現代の我が國語を見ると、實に亂脈を極めてゐる。殊に甚だしいのは外國語の濫用である。いのは外國語の濫用である。

ユニオン
カスケード
パリジャン
文化

いふものはその國の文野の程度を示すものである。その國の「國」となりを示し、嗜みを示すもの、人格に對していへば一種の國格を示すものである。随つて大きくいへば、國語はその國の過去、現在、未來を示すもので、或程度まで國運の消長を支配し暗示するものといふことも出来るであらう。

さて現代の我が國語を見ると、實に亂脈を極めてゐる。殊に甚だしいのは外國語の濫用で、山や川の固有名詞にまで、日本アルプス、日本ラインなどといつて、外國名をつける。殊に派手を競ひ流行を追ふ化粧品や飲料などの名稱に至つては、ライオン、スワン、ネージュ、ユニオン、カスケード、パリジャンなどといつて、西洋言葉でなければならぬやうにすらすらなつてゐる。これは多分、文化の程度に於て西洋が優れてゐるから、後進の日本がその眞似をするといふのであらう。けれども國民として國語を向上させる上からい

東夷
西戎

へば、我々は成るべくかういふ事のないやうに努力すべきである。殊に西洋諸國が、自分の國言葉を愛護して、立派に成立たせよう、發達させよう、外國の言葉は、よく／＼の事情のない限りは使はないことにしよう、と心掛け、そしてその心掛のためにその國の言葉が立派になり、言葉の立派になることによつて、國の面目も揚つてゐるのを見ると、我々は尙更我が國語を愛護する必要を感ぜざるを得ないのである。

遠い昔の事をいふと、今から二千數百年前に於て、既にギリシヤでは、文章、説話の兩方に通じて、外國語の濫用を控へるやうに、その道の學者達がやかましく言つてゐた。イギリスでは、文章、演説などに外國語を濫用することを、パリバリズム、即ち夷振といつて擯斥してゐる。フランスの國語自慢は名高いもので、音樂的の響が

イギリスでは文章、演説などに外國語を濫用することを、パリバリズム、即ち夷振といつて擯斥してゐる。

フリードリッヒ
大王
(1712-1786)

プロシア王國創
業時代の名君

あるとか、國際語としてフランス語に優るものがないとか言つて誇つてゐるのは、周知の事實である。ドイツでもフリードリッヒ大王の時代までは、佛國を崇拜して、氣の利いた文人は大抵フランス語を使つてゐたが、その中にドイツ語を守り立て磨き上げようといふ運動が盛んに起つて、段々國言葉を磨き上げた結果、土くさいドイツ語が、文學的、哲學的の立派な言葉となつて、高尚難解な思想を確實に現す點に於て、ドイツ語に優るものがないとまでいはれるやうになつた。またロシヤの如きは文學史上の新參國であるが、それでも人の心の微妙な變化の影を寫す點に於ては、世界の國語のいづれにも優つてゐると、自らも言ひ人も許す程になつてゐる。ツルゲネフがフランスで客死する時、臨終の床から故國の作者達に遺言して、「純粹なロシヤ語をいつまでも正確に保存して貰ひたい。」と言つたのは名高い話であるが、外國に於ける國語尊重

ツルゲネフ

(1818-1893)

ロシヤの文豪

の意氣は、これによつてその一斑を知ることが出来る。

これらの例を見ると、日本語も我々名々の心掛次第で、世界一の言葉に磨き上げることが出来るのであらうが、それについて第一に必要なのは、國語の主權確立といふことで、隨つて外國語に國語の主位を犯させぬのは深く警めねばならぬことである。無論外國語を使はねばならぬ場合もあらうが、それはよく／＼の除外例へば外國語が國語の向上を助け得る場合、もしくは國語が外國語を婢僕使し得る場合のみに止めて、その外は出来るだけ國語を用ゐて、國語を立派に磨き上げるやうに心掛けねばならぬ。

以上は外國語が國語の主位を犯し、國語の純粹味を損ふ場合の例であるが、近頃はまた地方の俗語が頻りに入り込んで來て、國語本來の意義や趣致に、一種の不健全な變化を與へてゐる。例へば、

日本語も我々名
名の心掛次第
で、世界一の言
葉に磨き上げる
ことが出来るの
であらうが、そ
れについて第一
に必要なのは、
國語の主權確立
といふことで、
隨つて外國語に
國語の主位を犯
させるのは深く
警めねばならぬ
ことである。

古史、副詞

古事記

三卷。我が國最古の歴史。和銅五年（三三三）に太安萬侶が編した。

祝詞

祭祀やこれに類する儀式の際に神前に於て唱へる詞。その一部は奈良朝以前に成立した我が最古の文章である。

宣命

天皇の天命を純粹の國語を以て宣布した文書。漢文の詔敕に對して國風の詔敕をいふ。

先年「トテモ」といふ詞が「非常に」といふ意味に使はれ始めて、それが恐しい勢で流行したことがある。また「私達」といふ言葉は今一般に使はれてゐるが、本來「達」は今の「方」といふのと同じく、敬意の添うた複數の接尾語で、いはば「皆様方」といふ意味である。『古事記』や祝詞、宣命、その他の古典を見ると、よくその原意がわかるが、神達、佛達、親王達、王達、君達、親達、先達などいつて、古文の使ひざまは、皆目上の神佛とか、皇族とか、親とか、師とか、少くとも尊敬すべき地位にある人を指す場合にのみ使はれてゐる。今日の用例は、これを逆まにして自分に加へたので、恐らく「オレダチ」「オイドン」などいふ俗語や方言から轉じて來たのであらう。俗語、方言から轉じたから、必ずしも悪いといふのではないが、今のところ何となく耳障りで、國語を不純にする嫌があるやうに思はれるからいふのである。とにかく今日は、實に言葉が複雑で、そして亂脈な時であるが、かうい

ふ時代に於て、國語を愛護するために、言ひかへると國語を少してもよくするために、我々はいかなる態度を取るべきであらうか。

二 國語の愛護 その二

我々は國語に對する今後の處置振について、成るべく正しくし、美しくし、豊かにし、そして統一あるものにするといふところに、根本の標準をおきたいと思ふ。まづ第一に正しく法則に合ふやうにしたい。次には法則に合ふのみならず、進んで、美しい、味はひのある、立派なものにしたい。その次には、更に進んで、趣味を豊かにしたい。但しいかに豊かで、變化に富んでも、チリム、バラ／＼では面白くないから、最後の要求として、纏つた統一のあるものにしたといふのである。

第一に、國語を正しくするといふのは、例へば、

我々は國語に對する今後の處置振について、成るべく正しくし、美しくし、豊かにし、そして統一あるものにするといふところに、根本の標準をおきたいと思ふ。

「御都合よろしいの時お宅に行きます。」

といふ文章があつたならば、それは西洋人まがひの不純な言葉遣で、正しくは「御都合のお宜しい時、お宅へ伺ひます。」といふべきであると言ひ正し、這次の内閣と書く者があれば、それは死語の拙い使用で、正しくは平易に「今度の内閣」といふべきであるといひ、

「季節によつて食物の選み方に多少の注意を要する。」

といふやうな文章があれば、それでは不精確で、食物の選み方に注意を要せぬ季節もあるやうに取られる恐れがあるから、正しくは、

「食物の選み方は、季節によつて多少變へねばならぬ。」

といふべきであると注意する類をいふのである。

すべて合法合格は言語文章の第一義で、正しい言表は美しい言表の土臺となるべきものである。我々がまづ、正しい國語國文、正格合法の言表といふ點に着眼し、讀書、作文、談話のすべてにわたつ

合法合格は言語文章の第一義である。

國語を美しくし、味はひのあるやうにするこ

と。
頬が落ちさうだ。

道草を食ふ。
舟をこぐ。

て、常に邪路を去り正路に就くやうに努めねばならぬといふ理由はこゝにある。

第二に、國語を美しくし、味はひのあるやうにするといふのは、例へば、うまい物を食べたといふことを言ひ表す場合に、「うまかつた」といへば、意味はわかり、文法にも合つてゐるが、たゞそれだけで、人を動かす味はひといふものがない。それを「頬が落ちさうだ」といへば、意味がわかるばかりでなく、一種の面白味が加つて來るであらう。「途中で遊んでゐた」「居睡をした」といへば、平明合法といふだけであるが、「道草を食ふ」「舟をこぐ」といへば、特別の味はひを感じさせられる。何のためであるか。それには、いろいろの理由があらうけれども、そのおもなる一つは、思ひ寄せた比喩が、奇抜でしかも妥當であるため、もう一つは、一事に二事を疊み込むところから、簡潔で同時に含蓄が深くなるためである。

常夜往く。

『古事記』の天の岩戸入の段に「常夜往」といふ句がある。天照大御神が天の岩戸に御隠れになつたので、永久の夜がつゞいた、といふことを現したのであるが、「夜」といふ怪物の黒い姿が、今日も明日も明後日もとのツシ／＼と限りなく續いて行くといふ恐しい不安の心持が、この三字五音の中に、いかにも面白く、簡潔に、しかも活き活きと現されてゐるではないか。

日本海大戦
明治三十八年
(三巻)五月二十
七日、東郷艦隊
がロシアのバル
チック艦隊を殆
ど全滅せしめた
海戦。
舷々相摩す。

昔の言葉文章のみならず、今のも同じことである。日本海大戦の公報に「舷々相摩す」といふ文句があつて持てはやされた。事實は船端と船端とが摩れ合つたといふだけで、言ひ表し方によつては、一向つまらない事になるのであるが、それが「舷々相摩す」といはれたので、何ともいはれぬ面白さを見せて來たのである。かやうに我が國には、古今に通じて美しい言葉が無數にある。そしてそれは磨けば益よくなるべき可能性を有つて居り、また言

葉を磨けば國民の生活が美しくなり、國の位が高くなるといふのである。お互が出来るだけ注意してこの國語を立派に守り立てて行くことは當然の務といはねばならぬ。

第三には、國語を豊かにせねばならぬ。今後の國語國文は、大體に於て、現代の口語を本位とすることに成らう。これは當然のことであるが、たゞ口語の一方に執着して他の諸要素を排斥するといふことでは、將來の國語を貧弱にし、狭小にする憂があるので、我々は是非とも現代の口語を本位とし、基調として、廣く衆美を總攝するといふところに、標準をおきたいと思ふのである。

口語文の何たるかについては、いろいろの説がある。その中で最も普通なものの一つは、口語文は今の人の話す通りに書くべきもの、文字通りに、口語そのまゝか、或は口語に少し磨きをかけた程度に書くべきもので、古語や外國語を取入るべきものではないと

國語を豊かにすること。
現代の口語を本位とし、基調として、廣く衆美を總攝する。

純粹味。

いふ考で、この考をもつてゐる人達の中には、古語や漢語を取入れると、いかにも取るべからざる餘所物を取つたかの如くに思ひ、或は敵に降つたかの如く、少くとも口語文の純粹味を傷つけたかの如くに思ふ人が澤山ある。またさういふ論者の中には、今の謂はゆる口語文の中には、内容の大部分を漢語や古語にして、ほんの端端だけを今風にごまかすものがあるといつて非難する人がある。無論これにも一理のあることで、語尾のみの口語文は、決して眞實の立派な口語文ではない。例へば、

「我が國は振古より瑞穂國と稱せられ、隨所に嘉穀穰々として野生した。」

といふが如きは、最後の二字が口語式になつてゐるだけで、あとは多く漢語で、そして全體が雅文仕立になつてゐる。これらは流行に乗つて口語文の眞似をしたもの、或は漢文に降參した一種の不

雅文仕立。

口語文の意義、本質、理想を談話のまゝの純口語、乃至準口語に限るのは、自ら低くし、狭くし、貧しくし、卑しくする所以であつて、口語文の前途を塞ぎ、口語文を窒息させるものである。

純な口語文ともいふべきもので、これを眞の口語文にするには、耳近い詞を用ゐ、漢文がかつた文脈の凝を採みほごして、前後一貫した調子に整ふべきであらう。かういふ似而非口語文が嘲られるのは尤ものことであるが、しかし口語文の意義、本質、理想を談話のまゝの純口語、乃至準口語に限るのは、自ら低くし、狭くし、貧しくし、卑しくする所以であつて、口語文の前途を塞ぎ、口語文を窒息させるものである。我々は、口語文は、その理想的本質からいふと、たゞ口語を本位とし、口語に基調を置くといふだけで、その本位を犯さず基調に合し得る限りは、古今東西のあらゆる言語文體を攝取して自分を肥やし豊かにすべきものであると考へる。それは父祖の遺産を子孫が繼承する場合と同じことである。我々は親の財産を受け繼いで、自分の理想を實現するために、それを活用し、尙ほその上に他からいろ／＼の要素を取入れ、なるべく増殖して子に

他の要素を我が基本の調子に化する呼吸は、向うの特色を取りながら、その角をたふして我に反を合はさしめるにある。

傳ふべきであらう。そして子は同様の方法により更に増殖して孫に傳へ、孫は更に／＼増殖して曾孫に傳ふべきであらう。新しい國語國文樹立の消息も同じことで、たゞその基調をはずすか外さないかが問題である。いかにしてその基調をはずさずして多くの他のものを攝取し得るかが問題になるのである。然らば他の要素を我が基本の調子に化する呼吸はどうかといふに、それは向うの特色を取りながら、その角をたふして我に反を合はさしめるにある。例へば外國語を日本文の中に挿入する場合ならば、外國語の主位を奪ひ角をたふして日本文になじませればよいので、同じ道理で、古語を現代口語文の中に加へる時にも、古語の主位を奪ひ角をたふして口語の基調になじませればよいのである。そしてそれが寧ろ我が口語文の大を成し、變化を添へ、趣致を豊かにする所以なのである。またこれが實際各時代の我が

平家物語
平家一門の榮枯
盛衰を描寫した
敘事詩風のすぐ
れた軍記物語。

文學の常に試みて來た事であつた。例へば『平家物語』の一節に、清盛が熱病に罹り、大苦しみをして死ぬるところを描いて、
「もしや助かると、板に水を置きて臥しまろび給へども、助かる心地もし給はず、同じき四日の日、悶絶躰地して、つひにあっち死ぞし給ひける。」

と言つてゐるが、この中には、少くとも性質の違つた三種の言葉が交つてゐる。一つは「臥しまろび給へども」し給ひける」といふ調子の王朝語である。一つは「悶絶躰地」といふ漢語である。そしてもう一つは「あっち死」といふ當時の俗語である。かやうに質の違つた三種の言葉が、各、それ／＼の特色を見せながら、仲よく並んで、一つの調和した空氣を成立たしてゐるではないか。これは王朝語を主位に立てて他の二つが反を合はせた結果であらうが、かういふ調子で行けば、現代口語文の中に古語を取入れ、或は外國語や方

様式の違つた文章の調和。

源氏物語

五十四帖。平安朝時代の小説中の最大傑作。紫式部の作。

日本紀

三十卷。神代より第四十一代持統天皇までのおもな史實を漢文で書いた編年體の歴史。日本書紀ともいふ。

言を取入れても、更に差支のないことと思ふ。

三 國語の愛護 その三

次には様式の違つた文章の調和であるが、これも昔から時代の變り目毎に、始終試みて來たことで、かくして前代の、或は外國の文體を取入れたればこそ、我が新時代の文章が、古語の品位と、新語の活躍味と、外國語風の珍しさと、國風の目安さとを兼ね備へて、趣味様式が段々豊富になつて來たのである。一體、新舊國語の裂け目は、文學の上では、まづ地の文と對話との對立に現れるのであるが、國語史上で、言語と文章と、口言葉と目言葉との一致したのは平安朝までであつた。例へば『源氏物語』の一節に、

「物語は」神代より世にある事を記しおきけるななり。日本紀などはたゞ片そばぞかし。これらにこそ道々しく精しき事は

あらめ。」とて笑ひ給ふ。

平安朝の文章は對話と地の文と兩方とも完全に王朝の雅言で通してゐる。言文未剖の純なる姿と見るべきところである。

歩み寄り、なじみ合つて來た。

宗盛

平清盛の次男。文治元年(一一九三)壇の浦の戦に捕へられ、近江國篠原で斬られた。年三十九。

伊豆守

源頼政の子、仲綱。父と共に以仁王を奉じ宇治川に戦ひ、治承四年(一一八四)敗死。

といふのがある。これは鎌倉時代ならば「精しい事は候らむ」とて笑ひ給ふなどいふべきところであるが、それを對話の詞でも「あらめ」といひ、地の文でも「給ふ」といつて、兩方とも完全に王朝の雅言で通してゐるところが、まだ言文未剖の純なる姿と見るべきところである。これが鎌倉時代になると、言と文とが背を向け始めたが、同時に各の姿をそのままに保ちながら、歩み寄り、なじみ合つて來た。例へば『平家』の「競が事」の中に、

宗盛卿使者を立てて、聞え候名馬を賜はつて見候はば、やと、宣ひ遣はされたりければ、伊豆守の返事には「さる馬をば持ちて候ひしを、この程あまりに乗り疲らかして候程に、暫く勞はらせんがために、田舎へ遣はして候」と申されければ、さらんには力及ばず」とて、その後は沙汰なかりけるが、多く並みゐたりける平家の侍

鎌倉時代の文章は對話を「候」で行き、地の文を平安朝語の「なり」「けり」で行き、兩方歩み合つて一種の調和した文體をなした。

室町時代の謡曲は「なり」「けり」と「候式」とが混融せず隣接して、しかも一種の調和した姿を見せてゐる。

ども、あつばれその馬は「一昨日も候ひし」「昨日も見えて候」「今朝も庭乗し候ひつる」など、口々に申しければ……

とあるが、簡單ながら、對話の詞を鎌倉語の「候」で行き、地の文を平安朝語の「なり」「けり」で行き、兩方歩み合つて一種の調和した文體を成したことが解るであらう。これは「なり」「けり」と「候」を所きらはず入り組ませたので、一種の雜居的、混融的調和ともいふべきものであるが、この「なり」「けり」と「候式」とが、混融せずに隣接して、しかも一種の調和した姿を見せたのが、室町時代の謡曲である。例へば、鉢の木の最初の「一節に、

次第ゆ行方ゆ定めぬ道なれば、行方さだめぬ道なれば、こし方もいづくならまし。ワキ詞、これは一所不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、あまりに雪深くなりて候程に、まづこの度は鎌倉のに上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。道行、信濃なる

淺間の嶽に立つ煙、淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くやあらしの大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ憂世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏のいた鼻や、佐野の渡りに着きにけり、佐野のわたりに着きにけり。詞、急ぎ候ほどに、これははや上野の國、佐野のわたりにつきて候。」

とあるが、地の文や節ちの附いてゐるところを「なり」「けり」「本位の王朝語にし、詞の部分」を「候」「本位の鎌倉語にし、これを隔置的、隣接的に引放し對立させて、それで立派な一種の調和が出来てゐるところが、特に面白いのである。

箇々の言葉が前にいつた通りであり、そして複雑な句や章もこの通りで、それが已に國語史上の實證を経てゐるとすれば、一つの文體を本尊とし、その本具の様式を基調として、趣致様式の異なる他の數多の語様文體を攝取し、融合し、臣僕化することは、今後の國

我々の言葉を立派に護り立てるのが、取りも直さず我々箇人名を立派にする所以であり、同時に國をも輝かす所以である。

語についても、決して不可能な事ではあるまい。要するに、國語は先祖から傳へられた大切な財産の一つで、これを立派に維持して、成るべく豊富にし、善美にするのが、子孫たる我々の義務である。また我々の言葉を立派に護り立てるのが、取りも直さず我々箇人名々を立派にする所以であり、同時に國をも輝かす所以であるといふのである。然らば、亂脈を極めてゐる今日の國語に對して、どうすればよいかといふに、大體四つの方針に歸するであらう。それは第一には、語法文法に合ひ、少くとも正しいといはれる程度にすること、第二には、正しきが上に更に美しく磨き上げること、第三には、自ら狭く限らずに、我が本領の基調を立派に立てて、これに合し得る限り成るべく多くの要素を取入れて豊かな姿のものに生おぼし立てること、第四には、豊かな中に統一のあるものに發達させること、この四つで、要するにこの標準により、我が國

吉田絃一郎

小説家、隨筆家
名は源次郎
佐賀縣の人
明治十九年生

大和めぐりは廢墟の遍路である。滅びたるものを弔ふ挽歌の旅である。

語を正しくし、美しくし、豊かにし、纏まりのあるものにして、國語を光らせた、國をも光らせた、そして少くともこの點から見て、我が國を世界の第一位に置きたいといふのである。（『國語の愛護』）

四 吉野山

吉田 絃 二 郎

大和めぐりは廢墟の遍路である。滅びたるものを弔ふ挽歌の旅である。

三輪、畝傍、なつかしい名である。麥畑、水田の中の古い町である。もし雨も降らば、更に情趣の深いことであらう。

畝傍からは電車になり、道は吉野へと上り坂になつてゐる。小山また小山を縫うて走る。碧珠のやうな吉野川の流を見出だすと、間もなく電車の終點である。

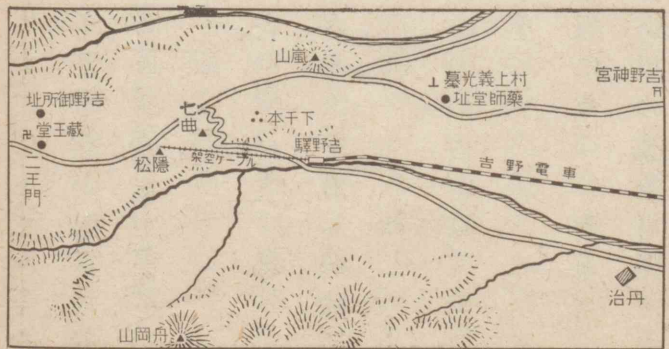
吉野川の長い鐵橋を渡れば、やがて人家が盡きて急坂にかゝる。

左手に吉野川を隔てて、上市のいかにも落ちついた町の姿が眺められる。

アーサー・シモンズ
(1862—)
英國の文學者。
ローマ
イタリヤの首都。
フロレンス
イタリヤ中部の都會。
ナポリ
イタリヤ南部の都會。

私は曾てシモンズのイタリヤ紀行を讀んだ時、一つの町を生けるものとして見た彼の見方を面白いと思つたことがあつた。ローマの町、フロレンスの町、ナポリの町、皆それぞれの脈搏を持ち、感覺を持つてゐる。

吉野川を隔てて、春光を浴びてゐる山の町、上市を見おろした刹那、私はシモンズの言葉を思ひ出さずにはゐられなかつた。私は曾て大和から伊賀に入つた日、木津川沿ひの修竹に圍まれた小さな村を見て、尊い藝術に對するやうな感激を経験したことがあつた。

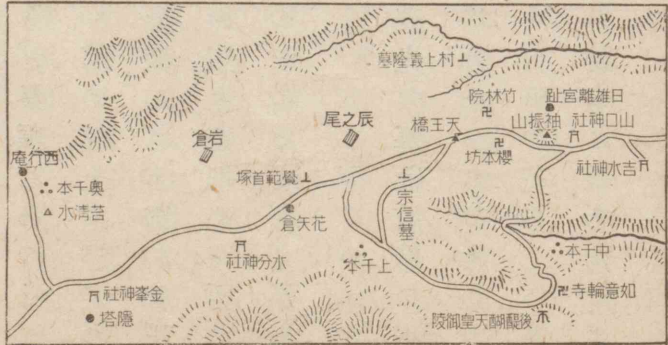


感興をそゝられた。

去年高野へ詣でた折、紀伊見峠のあたりで河内の山村を眺めた時も、ほゞそれに近い感興をそゝられたことがあつた。吉野から見た上市の眺も同じそれであつた。

美しい静かな自然の中にひとりてに作り上げられた小さな村、小さな町は、人間の手に作られた藝術に幾倍する尊さを持つてゐるのである。

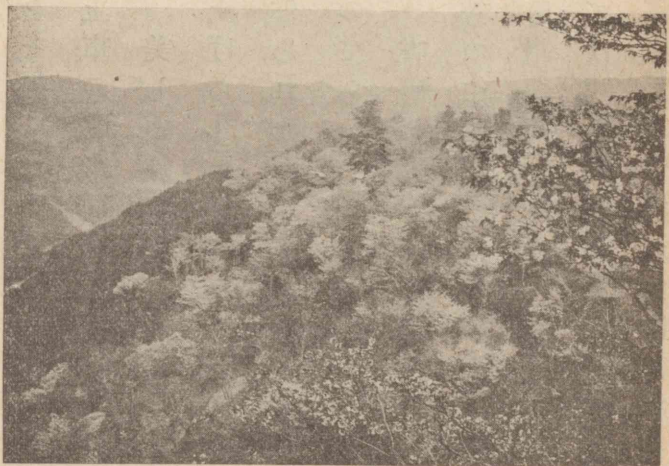
吉野川の上流に青い山が聳えてゐる。伊勢の山である。幾聯の筏が靜かに美しい吉野川の流を下つてゆく。道は山腰をめぐつては、川を失ひ川を見出だす。急坂を登りつくしては、やがて深い谿に沿うて緩かな道となる。櫻の老木がまづ道を掩ふまでに咲



道は山腰をめぐつては、川を失ひ川を見出だす。

宿場の家々を埋めて雲の如き花が薫つてゐる。

村上義光
護良親王の家臣。元弘三年二月、吉野山で宮に代つて討死した。
歌書よりも各務支考の句。



の眺が始る。「歌書よりも軍書に悲し芳野山の跡も、このあたりより始るのであらう。

いてゐる。道は尾根を傳うて一上一下して走る。下の千本、中の千本はちやうど見頃であつた。山の背を一筋の赭土道が走つてゐる。道を挟んで吉野の宿場があり、宿場の家々を埋めて雲の如き花が薫つてゐる。谿も峯も本花である。

吉野山は花の山であり、同時に数々の人間哀史の山である。

吉野山は花の山であり、同時に数々の人間哀史の山である。吉野朝五十年の御所跡に立てば、花は旅人の悲しみをこめて散りに



の宿の面影が残つてゐる。道は再び急峻になる。宗信法印の輪

櫻の坊
今は櫻本坊といふ。
宗信法印

吉水院の住僧。後醍醐天皇、吉野に駐紮の折僧兵を率ゐて警護し奉つた。

如意輪堂の朝(郷倉千鞠筆)

散る。

宿に着いたのは五時過ぎであつた。出来ることなら今日のうちに奥の西行庵をたづねて、明日は如意輪寺あたりの花を見て、成るべく人出の少いうちに山を下りたいと思つたので、宿に着いて休む間もなく、更に山を登ることにした。櫻の坊、竹林院の前を通り過ぎて、天王橋あたりからはさすがに昔のまゝの山道は再び急峻になる。宗信法印の輪

二三丁
一丁は約百九メ
一トル。

一間物
一間は約百八十
二センチ。

塔が暗い木立の中に、冷たい苔に包まれて立つてゐる。

宗信法印の墓から二三丁登つたところで、奥から木をおろして
来る杣人達に逢つた。丸木をそのまま、車輪にした小さな車の上
に、吉野の杉材を載せて、山を下つて來るのであつた。有名な吉野
杉である。一間物と二間物とあるが、いづれも氣持のいゝほどよ
く柁が通つてゐる。私は尋ねた。

「高野山は見えますか。」

「この上の山から見えます。あれが金剛山、葛城山……それから
もう少し左手に高野が見える筈です。」

私は杣人に教へられたまゝに山を登つて行つた。幾度か立ち
どまつては麓の花を眺めた。谿は暮れかゝつてゐた。花は霧の
如く、山の背を走る道と谿とを埋めてゐた。吉野川であらう、暮色
に包まれた幾重の山のかなたに銀の如く光つては、やがて落日と

花は霧の如く、
山の背を走る道
と谿とを埋めて
ゐた。

佐藤忠信
源義經の臣、出
羽の人。文治二
年（一一八四）京都で
頼朝の兵に攻め
られて死んだ。
年二十六。

共に暮れて行つた。

そこらにはまだ梅が咲いてゐた。櫻はまだ堅く蕾んでゐた。
花屋倉は急峻な坂を擁して俯瞰する峠の足溜りである。昔はこ
こに山門のやうなものでもあつたのであらう、佐藤忠信が吉野の
僧兵を防矢した場所であると傳へられてゐる。更に二三丁行つ
たところに水分神社がある。古風な建築である。軒も庇も欄干
も苔むしてゐる。水分神社から更に坂を攀ぢて數丁登つたとこ
ろで、私は若い二人づれの杣人に逢つた。

「これから奥の西行庵まで行けませうか。」

「まだ十五六丁はありますがな。それに、行きついても、あつちは
暗い山の中ですから、今日は山を下つた方がいゝでせう。」

私は杣人と別れて、暫くそこに立つてゐた。

春の夜の満月が伊勢の山に出た。落日が高野あたりの山のか

蕪村

徳川時代後期の俳人。姓は谷口。または與謝。天明三年(一八一三)歿。年六十七。

月は東に

菜の花や月は東に日は西に

西行

俗名佐藤義清。圓位と號した。二十三歳の時出家。建久元年(一一五〇)寂。年七十三。

芭蕉

徳川時代前期の俳聖。松尾宗房。伊賀の人。元禄七年(一六九〇)歿。年五十一。

環境

なたに沈んで行つた。私は暫くの間、吉野の奥の満月と落日とを、たゞひとり靜かに味はふことが出来た。蕪村の「月は東に日は西に」の句を思ひ出さざるを得なかつた。私は西行庵を斷念して、ひたぶるに吉野の奥の満月に眺め入つた。

谿は霧に包まれてしまつた。月の光はまだ谿の底までは届かなかつた。風の音も絶えた。私は坂道の傍にしゃがんだ。その一筋の道を、曾て西行が歩み、芭蕉が辿つたであらう。かう考へると、薄闇の中の小徑も尊かつた。

どこの家でも、花見の客達が夜の更けるまで騒いでゐた。私は寢床にいたが、どうしても眠れなかつた。夜が更けて、月の光が眞冬のやうに澄んで來ても、人々は唄をやめなかつた。私は一刻も早く夜が明けて、この騒がしい環境から逃れたいと思つた。

救はれたやうな快さを感じた。

麓は霧の海に包まれてゐた。

夜の明けるのを待ちかねて、私は起きた。顔も洗はずに、逃げるやうにして宿を出た。私ははじめて救はれたやうな快さを感じた。道には眞白に霜がおりてゐた。

昨日夕方歩いた坂道を、再び花屋倉の方へ登つて行つた。麓は霧の海に包まれてゐた。奥の千本に近く金峯神社がある。役の行者の道案内を勤めたといふ山神の木像が石磴の傍に祀られてある。中老の宮守が一人焚火をしてゐた。そこへ七八人連の大峯詣りの道者達が裏の山道を下つて來て一緒に火にあたつた。

私はその人達に別れて、更に急な坂を登つて行つた。小鳥の聲が聞えて來た。

大峯への道から右に岐れて、杉の木立の中を四五丁も歩いて、谿に下つたところに苔清水がある。水は暗い木立の下をくゞつて五六尺の高さから落ちてゐる。木の傍に梅室の手に成つた芭蕉

梅室

徳川時代末期の俳人。櫻井氏。加賀の人。嘉永五年(一八三三)歿。年八十四。

露とくくく、
露とくくくこ、
るみに浮世す、
がばや
(甲子吟行)

半段
約五アール。

眺むるに、佇む
に、たゞ涙流る
るばかりの尊さ
を覺える。

の「露とくくく」の碑が立つてゐる。碑は苔に掩はれて文字のみ黒く沈んでゐる。何となく物體ない心地もしたが、苔清水を手に掬んで漱ぎ飲む。

とくくくの水から更に南へ一丁ばかり、山の腰に沿うて狭い道を行くと、急に半段ばかりの地が展けて、周囲には縦が繁り、殊に櫻の老樹が多く繁つてゐた。そのやゝ平らな林間の片隅に、山を負うて西行庵が立つてゐる。辛うじて一人の膝を容るゝに足るほどの草の庵である。眺むるに、佇むに、たゞ涙流るゝばかりの尊さを覺える。
こゝに来て、西行がよしの山やがて出でじとおもふ身を花ちり



庵 行 西

寂人の影。

源平盛衰記
應保から壽永に
至る約二十年間
に於ける源平二
氏の盛衰を記し
た軍記。
忠度
平忠盛の子 壽
永三年(八四四)歿、
年四十一。

なばと人やまつらん」の歌を思へば、西行の悲しい決心が眼に見えるやうで、草も清水も歎歎うなげしてゐるやうな氣がする。六尺の大男西行が吉野の奥の地にしがみついて泣いてゐる悲しさが旅人の腸にこたへて来る。
恐らく芭蕉もこゝに佇んで泣いたであらう。何といふ偉大な二つの寂人の影が、曾てその草の上に投げられたことであらう。再びとくくくの水を掬び、私は如意輪寺の方へと志して山を下つた。

五 朽ちぬ形見

(『源平盛衰記』)

薩摩守忠度と申すは、入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りたりけるが、郎等六騎相具して、忍びて都へ歸り上る。如法夜半のことなるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを

入道

平清盛、後淨海
入道、太政大臣、
養和元年(一二三二)
歿。

俊成卿

藤原氏、皇太后
宮大夫、正三位、
五條京極に居
住。元久元年(一一八
六)歿。

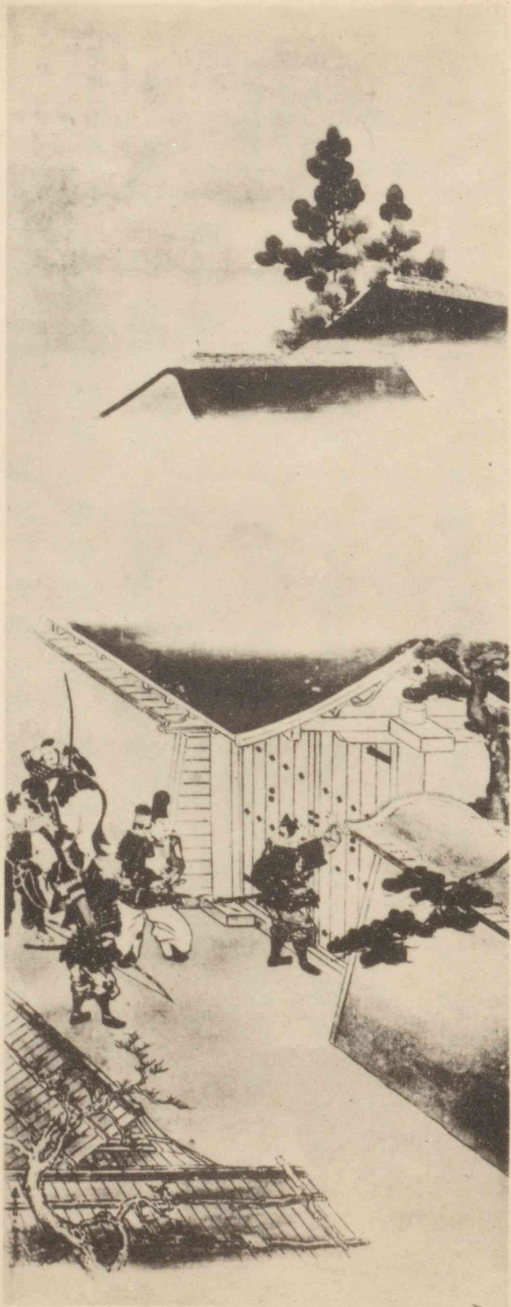
敕(勅)

身は八重の潮路
の底に沈むと
も、藻鹽草かき
置く末の言の
葉、後の世まで
も朽ちぬ形見に
傳り侍れかし。
御下。

聞きけれども、かゝる亂れの世なる上、いぶせき夜半のことなれば、
敲けども、開かざりけり。あまりに強く敲きければ、やゝ久し
くありて、青侍を出だし、戸をば開かてこれを問ふ。「忠度と申すも
の見參に申し入れたきことありて參りたり。」と答へければ、三位大
庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細めに開き
て對面あり。

忠度宣ひけるは、「かゝる身として御ため憚あれども、所詮一門榮
華盡きて都に安堵せず、西海へ落ち下り侍り。亡びんこと疑なし。
世靜まりて後定めて、敕撰の沙汰候はんか。たとひ身は八重の潮
路の底に沈むとも、藻鹽草かき置く末の言の葉、後の世までも朽ち
ぬ形見に傳り侍れかしと思ひ出でて、河尻より忍び上つて侍り。
これぞ年頃詠み集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下
に水屑となさん事遺恨に侍り。これを砌下に進じ置き候。敕撰

忠度の訪れ



(弦廼舎畫迹)

の時は必ず思し召し出でよ。とて、卷物一卷泣くく、鑑の引合せより取出したり。

たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、救撰の時は思ひ出で侍るべし。

古詩

後江相公（大江朝綱）の詩句。倭漢朗詠集錢別の部に出づ。

三位感涙を流し、これを受取りて、御詠一卷預り置き候ひをはんぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。この忽劇の中に、御音づれに預ること恐悦少からず候かな。たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、救撰の時は思ひ出で侍るべし。と宣へば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも、思ふことなし。とて、馬に乗り、古詩を、

前途程遠

馳思於雁山之暮雲

後會期無

霑纓於鴻臚之曉淚

と、打上げく、詠じつ、南を指してぞ落ち行きける。本文には、後會期遙と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別れなりと思ひければ、後會期無と詠じけるこそ哀れなれ。三位も名

哀れなるにも
涙、優なるにも
涙、忍びの袖を
ぞ絞られける。

千載集

後鳥羽天皇の文
治三年(八四七)後
白河法皇の院宣
によつて成る。

志賀の都

天智天皇の都、
近江國大津の
北方約二キロ。

ながら

長良(大津の西
方の山)に掛け
ていふ。

残の惜しくして、遙かにこれを見送りて、あはれ世に在りしには、この人どもにこそ諂ひ追従せしに、變る習とて、今は門を隔つることの悲しさよ。」と、哀れなるにも涙、優なるにも涙、忍びの袖をぞ絞られける。

世靜まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、河尻より上りたりし志を思ひ出で給ひて、「故郷の花」といふ題に、「讀人不知」とて一首入れられたり。

さざ浪や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山ざくらかな

と詠める歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚りたまひて、たゞ一首をぞ入れられける。亡魂いかにうれしく思ひけん。哀れに優しくぞ聞えし。

楨有恆

登山家

仙臺の人

明治二十七年生

鋭い山、穩かな山、親しい山、怖しい山、手を連ねて屏風の如く聳ゆる山、大空に孤高を持して寂寥を夢みてゐる山、かう考へて来たただけでも、私は手の下しやうのない狼狼を感じるばかりである。

六 カナダ・ロッキーの思出

楨 有 恆(據)

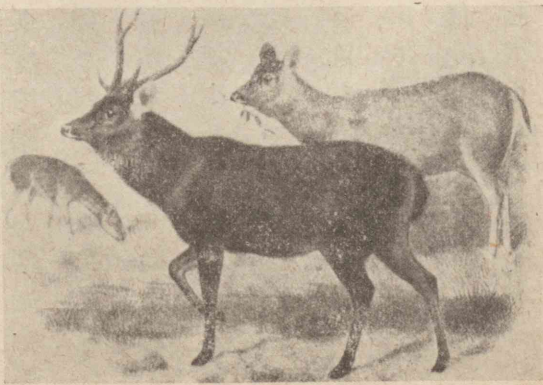
山の姿は、思出に蘇つて來ては、いつも爽快な氣分に我々の胸を躍らせる。目をつぶつてじつと考へると、曾て踏破した幾十幾百の山岳が、それ々、獨自の箇性を有つて群り迫つて來る、そのうれしさ心地よさを何に譬へよう。鋭い山、穩かな山、親しい山、怖しい山、手を連ねて屏風の如く聳ゆる山、大空に孤高を持して寂寥を夢みてゐる山、かう考へて來ただけでも、私は手の下しやうのない狼狼を感じるばかりである。その競ひ起る回想の中から、私はカナダ・ロッキーの印象を唯一つ語つてみたいと思ふ。

アメリカは原生のままの自然に、最近代的な設備を施して悦んでゐる國である。生地のままの森や野を切り拂つて、能ふ限りの人工に酔うてゐる國である。

原始林の谷

森に埋められた
谿谷と山と、そ
してその間を縫
つて走る長い長
い鐵の線路と
が、一脈の人の
氣配をたゞよは
せてゐる。

我々の乗つた汽車がロッキーマウンテンの山麓に入つた時の第一印象は、實に忘れられぬものであつた。原始林の谷が際涯もなくつゞいて、その林の上に、思ひ切つた斷崖の山岳が、雪を戴いて聳えてゐた。連山といひたいが、谷が餘りに大きいので、孤立してゐるやうにも見える。こゝにはアルプスに見るやうな山腹の牧場もない。まして人の住むシャレや、村里は更にない。森に埋められた谿谷と山と、そしてその間を縫つて走る長い、鐵の線路とが、一脈の人の氣配をたゞよはせてゐるだけである。



群の鹿む食を草

我々は馬の背に數十日分の食糧を積んで、この道なき森を、ロッキーマウンテンの核心へと旅をつゞけたのであつた。アサバスカといふ河

キャラバン隊商



峰連のロッキーマウンテン

に沿うて溯つた週日に餘るこのキャラバンの旅は、歴史のある國土では、幾百千年以前にとくに消えてゐる光景であつた。熊もゐる。鹿もゐる。馴鹿の群が河原に草を食んでゐる。その間を終日乗馬をつゞけて後、適當な露營地を求めては幕營をしつゞ進んで行つた。忘れられぬのは、無数の星の輝く高い空の下で、キャンプの焚火の邊りに集つた一行の人々である。その中には牧童もゐた。スミス人もゐた。この人たちの謠ふ歌は多くは便利な都を思慕するものであつた、さうでなければ、暫し

近代生活の苦患から逃れ得た喜を歌ふ。

なりとも近代生活の苦患から逃れ得た喜を歌ふものであつた。ロッキーに入つた初の人間はインディアンで、しかも極めて少數の獵師に限られたが、百五十年前から、高價の毛皮を商ふ歐洲人が、彼等の足跡をたどつて、段々峠を東から西へと越え始めた。我々の入つたカナダのロッキーは僅々二十餘年前に、人目に觸れて、名を付けられたばかりである。隨つて名も持たぬ山や、谷や、氷河が到るところに充ち満ちてゐて、まだ一通り備つたといふ程度の地圖すらない。

この山では、氷河から流れ出た川が、人里に觸れることもなく、森を通り、野を走つて、氷の海に注いでゐる。こゝでは珍しい極光が見られる。我々は一夜マウント・アルバータの裾でその極光を見た。

ロッキーには、美しいお花畑が少い。この山に特殊なる光景は、

山火に荒れた黒い木立の焼野が原を、黄色な花が蔽つてゐる。

山火に荒れた黒い木立の焼野が原を、黄色な花が蔽つてゐることであつた。その木立の奥に、名もない鋭い山岳が、消ゆるを知らぬ氷雪を厚く戴いて峙つてゐることであつた。そしてその白雪の背景をなして、紺青の高空の高く蓋つてゐることであつた。私はいつも思ふ、原始のまゝの荒涼たる自然を味はつた者には、非常な苦痛が課せられるが、同時に非常な幸福が與へられると。この二つは實地の探検のものにも與へられるが、その餘光が想像の思出にまで及ぶのは愉快なことである。

七日野山の閑居

鴨 長明

いま日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出だして竹の簀子を敷き、その西に閑伽棚を作り、中には西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。かの

日野山

今は京都市伏見

區。醍醐の南。

鴨 長明

鎌倉時代の歌人

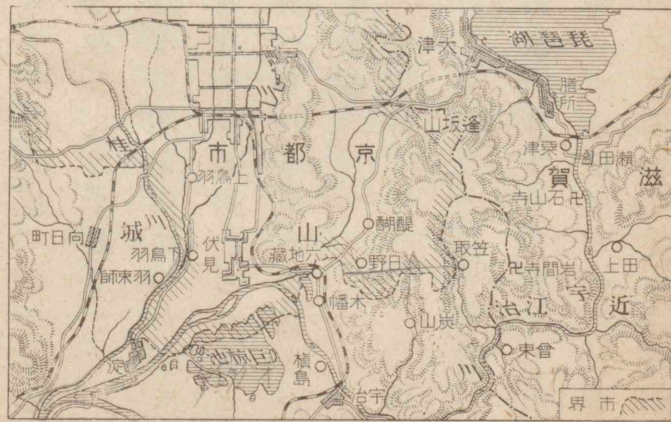
法名蓮胤

山城國加茂社の

氏人

普賢 菩薩の名。釋迦佛の右脇士。
不動 明王の一。降魔の劍を持つ。
往生要集 六卷、慧心僧都(一條天皇時代の人)の著。極樂往生に肝要な文句を諸經より集めたもの。

帳の扉に普賢並びに不動の像をかけた。北の障子の上に小さき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集ごとき抄物を入れたり。傍に箏、琵琶おのゝゝ一帳をたつ。いはゆる折箏、繼琵琶これなり。東にそへて、蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出だせり。枕の方にすびつあり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはちもろゝの藥草を植ゑたり。假の庵のありさま、かくの如し。



置位の山野日

觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西のかたに匂ふ。積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。

跡の白波 世の中を何にたどむ朝ほらけ漕ぎゆく舟のあとの白波(沙彌満誓、拾遺集) 岡の屋 今の京都府宇治郡宇治村。

その所のさまをいはず、南に笥あり、岩を壘みて水をためたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念のたよりになきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西のかたに匂ふ。夏は時鳥をきく。語らふごとに死出の山路をちぎる。秋は蝸の聲耳に充てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものらく讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らん。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督の流を

潯陽江 溆陽江頭夜客ヲ
送ル、楓葉荻花
秋愁々、白樂天、
琵琶行
源 都督
桂大納言源經信
のこと。琵琶の
名手。
秋風、流泉
琵琶の曲の名。

手の奴、足の乗
物、よくわが心
にかなへり。

ならふ。もし餘りの興あれば、しばし松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにはあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

それ人の友たる者は、富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんにはしかず。人の奴たるものは、賞罰の甚だしきを顧み、恩の厚きを重くす。さらに育みあはれぶといへども、安く靜かなるをば願はず。たゞ我が身を奴とするには如かず。もしなすべきことあれば、則ちおのが身をつかふ。たゆみからずしもあるねど、人を従へ、人を顧みるよりはやすし。もしありくべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心を悩ますには似ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手の奴、足の乗物、よくわが心

人に交はらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども猶ほ味をあまくす。

にかなへり。心また身の苦しみを知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。つかふとてもたゞびし過ぎず、ものうしとても心を動かすことなし。いかに況んや、常にありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らん。人を苦しめ、人を悩ますは、また罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。衣食のたぐひまた同じ。藤の衣、麻のふすま、得るに隨ひて肌をかしくし、野邊の茅花、峯の木の實、わづかに命をつなぐばかりなり。人に交はらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども猶ほ味をあまくす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにはあらず、たゞわが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

大かた世を遁れ身を捨てしより、恨もなく恐もなし。命は天運にまかせて、惜しまず、厭はず、身をば浮雲にならずらへて、たのまず、ま

だしとせず。一期の楽しみはうたゝねの枕の上にはまり、生涯の望は折々の美景に残れり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずは、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出てては、乞食こじきとなれることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとりん。

(「方丈記」)

方丈記

鴨長明の作。世相人情の非を歎き、日野山に隱退した前後の感想録

橋 千蔭

國學者
通稱加藤又左衛門
芳宜園、耳梨山人、江翁等の號あり

文化五年(四六〇)歿、年七十四
さいなみや云々
清水濱臣の家の名泊泊舎(さいなみのや)
白妙の
あらがねの

五百つ集ひ
いろくつ

八蓮を見る辭

橋 千蔭

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水のほとりに、さいなみや志賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。

白妙の富士のみ雪もきえ、あらがねの土さへ裂くといふなる頃、人みな涼みせむとてそのやどりに集ひて、高き屋に上りて見渡せば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにてはありける。おひたてる葉の廣どりたるは、宮路ゆく貴人うまひとのきぬがさの如く、浮きたるは、大庭に百の司のわらふだ敷き並べたる如く、葉に置ける露は、白玉の五百つ集ひを解き亂したるになむ似たりける。池の水清らに澄みて、遊ぶいろくづ思ふことなげなり。

人々おばしまに寄りゐて、酒くみかはす程、彼の岡の木高かる瑞枝吹きこす風のすゞしきに、えならぬ香のかをりくるもたとしへ

かた

(谷靜繼開山鳥語、
梯)危斜踏峽猿聲
わびしちにましら
な鳴きそ足引の山
のかひある今日に
やはあらぬ(和漢
朗詠集)
せりければ

日の入る國のま
すらをの法
あへりけり
によびいづ
もだもあらず

なしや。彼方の岸より中島まで長き堤をつきて、石もて作れる橋
かけわたせるは、もろこしの西の湖とかいふめる處のさまかける
かたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖のにほひさへなつかしく
見ゆ。

危斜踏峽猿聲
わびしちにましら
な鳴きそ足引の山
のかひある今日に
やはあらぬ

あるじはわが國ぶりの歌
つくり、書見ることをしも好
めるが上に異國の書をさへ
に朝夕の友とせりければ、さ
る方の友垣にしも乏しから

ず。唐歌好める何がしの博士は、さにぬりの小舟に棹さして、此の
花折らせまくおもひ、日の入る國のますらをの法に心を寄するは、
これぞ此の上の品の臺に生れ出でたらむ心地するなど言ひあへ
りけり。人々心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

ふとめる
ものから
あがれ
うけらが花
橋千蔭の歌文集

荒木田守武
足利末期の連歌
師
伊勢の人
天文十八年(三三)
亡歿、年七十七
四方赤良
江戸の俳人、狂
歌師
太田南畝、また
蜀山人と號す
文政六年(三四)三
歿、年七十五

なべて世のにごりにそまで住む人の
友と見るべき花ぞこの花

かくて上野の岡の入相の鐘木の間しのぎて響きわたれば、み盛
りに開けたりし花の、またふとめる様に立ちかへりたるもあはれ
深かるものから、遠方の梢の驚すら時求むるものをとて、人々あが
れ歸りぬ。
〔うけらが花〕

九 狂歌八首

荒木田守武

虎に騎りかたわれ舟に乗れるとも

人の口はにのるな世の中

四方赤良

改年の御慶めでたく天の戸を

明けましてよい春は來にけり

一つとり二つとりては焼いてくふ

鶉なくなる深草のさと

風來山人

この調子きいてくれねば三味線の

ちりてつとんとひいてしまふぞ

栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の

動き出だしてたまるものは

風來山人 江戸の奇人、發明家、作家
平賀源内 安永八年(一四三九)歿、年五十七
栗柯亭木端 大阪の狂歌師、真宗の僧
安永二年(一四三三)歿
宿屋飯盛 江戸の國學者、石川雅望、六樹園とも號す、江戸の人
天保元年(一四九〇)歿、年七十八

馬場 金埒

雪ならばいくら酒手をねだられん

花のふぶきの志賀の山かご

唐衣 橘洲

いづれまけいづれかつをと郭公

ともににはつねの高うきこゆる

尾崎 紅葉

一〇 初夏の鹽原

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我は安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間の獨りに倦み疲れつゝ、始めて西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は闊く、地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦

尾崎紅葉 明治の小説家、名は徳太郎、東京の人、明治三十六年(一九〇三)歿、年三十七
安からざる悒鬱を抱きて―五時間の獨りに倦み疲れつゝ。

馬場金埒 江戸の狂歌師、大阪屋甚兵衛、文化四年(一四七七)歿
唐衣橘洲 江戸の狂歌師、小島泰從、享和二年(一四六三)歿、年六十

天は闊く、地は
退かに、たゞ平
蕪迷ひ、斷雲飛
ぶのみにして。
三里
約十二キロ。
淙々の響。

驚破や、こゝに
空山の雷、白光
を放ちて崩れ落
ちたるかとすさ
まじかり。
この緒よりやと
琴の音に峰の松
風かよふらしい
づれの緒よりし
らべそめけん
(齋宮女御、
拾遺集)

途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて、行くほどに路は窮らず。漸
く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡くるところに淙
淙の響ありて、これに架かれるを入勝橋となす。



尾 橋を渡りて僅かに行けば、日光暗
く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、谷深く
崎 陥りて、幾廻りせる葛折の、後には密
紅 樹に聲々の鳥呼び、前には幽草歩々
葉 の花を發く。愈登れば、遙かに木が
くれの音のみ聞えし流の、水上は淺

く見えて、驚破や、こゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかと
すさまじかり。道の右は山を切りて長壁となし、石幽に蘚碧うし
て幾筋ともなく白絲を亂しかけたる細瀑小瀑の、珣々としてそゝ
げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと見捨てがたし。

三十尺
約九メートル。
道あれば水あ
り、水あれば必
ず橋あり、全溪
にして三十橋。

雨來らむとして
顔にあがる花火
かな
紅葉

片岨

巉巖

車を驅りて白羽坂を越えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみ
て、山中の景は始めて奇なり。

尾崎紅葉筆蹟

これより行きて、道あれば水あり、水
あれば必ず橋あり、全溪にして三十
橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず
瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれ
ば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村
にして四十五湯。なほ數ふれば、十
二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探
り得べき。

そも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深
く西北に入り、綿々として箒川の流にさかのぼる片岨にして、到
るところ巉巖の水を夾まざるなきは、さながら青銅の藥研に瑠璃末
を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば、根本山、魚止瀑、兒が淵

左^{ひだり}の嶮^{つば}は古^{ふる}りて、白雲洞^{はくうんどう}は朗^{ろう}らかに、布瀑龍^{ふたつたきりゆう}が鼻^{はな}材^{ざい}木石^{もくせき}、五色石^{ごしきせき}、船岩^{ふねいわ}なんどと眺^{なが}め行^いけば、鳥居^{とりい}戸^と前山^{まへやま}の翠^{すい}衣^いに染^{ぞめ}みて、福渡^{ふくわた}の里^{さと}に入る^いなり。

途^{みち}すがら前^{まへ}面の^{めん}崖^{がき}の^{ところ}ろくに、躑躅^{しゆくしゆく}の残^{のこ}り、山藤^{やまふじ}の懸^かかれる



近附洞雲白原鹽

が、いと興^{きよう}ありと眼^{まなこ}留^{とど}めつ
つ行^いくほどに、鹽釜^{しほかま}の湯離^{ゆり}
れ室^{むろ}、甘湯澤^{あまかみ}、兄弟^{あにがと}瀧^{たき}玉簾^{たまだれのせ}瀨^せ
小太郎^{せうたろう}が淵^{ふち}など打^う過^すぎて、
やがて路^{ちみち}のほとりに高^{たか}き
は寺山^{てらやま}、低^ひきは人家^{にやが}の在^ある
ところ、即^{すなは}ち畑^{はたけ}下^か戸^との里^{さと}に
着^つきぬ。

畑^{はたけ}下^か戸^とは一村^{いちむら}十二^{じふに}戸^と、温泉^{おんせん}は五箇^{ごか}所に湧^わきて、五軒^{ごけん}の宿^{しゆく}あり。こ

二十丈
約六十メー
ル。

四面遊目に足り
て丘壑の富を擅
まにし、林泉の
奢を窮め。

ここに清琴樓と呼べるは、南にあたりて箒川の緩く廻れる磧に臨めり。俯しては水石の粼々たるを弄ぶべく、仰げば西に富士、喜十六の翠巒重疊して、清風座に満ち、袖の澤を落ち來る流は、吉井瀑となり、二十丈の絶壁に懸かりて、素練を垂れたるかと思ふ。東北は山また山を重ねて、玳玳の玉簾深く、夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて、丘壑の富を擅まにし、林泉の奢を窮め、またあるまじき清福自在の別境なり。

我はこの繪を見る如き清穩なる風景に逢ひて、かの途すがら嶮しき巖と激しき流とのために、幾度か魂飛び肉消えて理むる方もなくかき亂されし胸の中の、靄然として頓に和らぎ、恍然としてすべてを忘るゝを覺えたり。

まことに好くこそ我は來つれ！ なんぞ來ることの甚だ遅かりし。山の麗しといふも、壤の堆きのみ、川の暢けしといふも、水の

身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。

逝くに過ぎざるを、牢として抜くべからざる我が半生の痼疾の、いかでか壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、まづ侮らるべき愚かの者ならずや。

見よ、見よ、木々の緑も、浮かべる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹き來る風も、日の光も、雞の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂へを忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞れを忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは、今よりかくの如くにして我が生を終へんかな。（『金色夜叉』）

幸田露伴

文學者
文學博士
名は成行
東京の人
慶應三年生

我等が頼む師は當世に肩を比すべき人もなく、八宗九宗の碩徳達、虎豹鶴鷺と勝れ給へる中にも、絶類拔群にて、譬へば獅子王、孔雀王。

一一五重塔

幸田露伴

感應寺生雲塔いよゝ、物の見事に出來上り、段々足場を取除けば、次第次第に露はるゝ一階一階また一階、五重巍然と聳えし様、金剛力士が魔軍を睥睨んで十六丈の姿を現じ、坤軸動がす足ぶみして、巖上に突立ちたる如く、天晴れ立派に建つたるかな、あら快き細工振りかな、稀有ぢや、未曾有ぢや、再あるまじと、圓道始め一山の學徒も躍りあがつて歡喜び、これでこそ感應寺の五重塔なれ、あら嬉しや、我等が頼む師は當世に肩を比すべき人もなく、八宗九宗の碩徳達、虎豹鶴鷺と勝れ給へる中にも、絶類拔群にて、譬へば獅子王、孔雀王、我等が頼むこの寺の塔も絶類拔群にて、奈良や京都はいざ知らず、上野、淺草、芝山内、江戸にて此塔に勝るものなし、殊更塵土に埋れて光も放たず終るべかりし男を拾ひあげられて、心の寶珠の輝

達賦伽尊者
釋迦の弟子で、
建築に巧みであ
つた。

夜半の鐘の音の
曇つて、平日に
は似つかず耳に
きたなく聞えし
がそも〜。

きを世に出だされし師の美德、困苦に撓まず知己に酬いて、遂に仕
遂げし十兵衛が頼もしき、面白くまた美はしき奇因縁なり、妙因縁
なり、天の成せしか、人の成せしか、將また諸天善神の陰にて操り給
ひしか、屋を造るに巧妙なりし達賦伽尊者の尊はあれど、世尊在世
の御時にも如是快き事ありしを未だ聞かねば、漢土にも聞かず、い
て落成の式あらば、われ偈を作らん、文を作らん、われ歌をよみ詩を
なして、頌せん、讚せん、詠ぜん、記せんと、各互に語り合ひしは、慾のみ
ならぬ人間の情の、優しくもまた殊勝なるに引替へて、測り難きは
天の意、圓道、爲右衛門二人が計らひとして、いと盛んなる落成式執
行の日も略、定まり、その日は貴賤男女の見物を許し、貧者に剩れる
金を施し、十兵衛その他を犒ひ賞する、一方にはまた伎樂を奏して
世に珍しき塔供養あるべき筈に、支度とり〜なりし最中、夜半の
鐘の音の曇つて、平日には似つかず耳にきたなく聞えしがそもそ

闇に揉まるゝ松
柏の梢に天魔の
號びものすこ
く。

四里
約十六キロ。

横柄子。
辛張棒。
可愼。

も、漸々あやしき風吹き出して、眠れる兒童も、われ知らず夜具踏み
脱ぐほど、時候生暖かくなるにつれ、雨戸のがたつく響烈しくなり
まさり、闇に揉まるゝ松柏の梢に天魔の號びものすこくも、人の心
の平和を奪へ、平和を奪へ、浮世の榮華に誇れる奴等の膽を破れや、
睡りを攪せや、愚物の胸に血の濤打たせよ、僞物の面の紅き色奪れ、
斧持てる者斧を揮へ、矛もてるもの矛を揮へ、汝等が鋭き劍は、饑ゑ
たり、汝等劍に食を與へよ、人の膏膩はよき食なり、汝等劍に飽くま
で喰はせよ、飽くまで人の膏膩を餌へ」と、號令きびしく發するや、否
猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉、矛もてる夜叉、饑ゑたる劍も
てる夜叉、皆一齊に暴れ出しぬ。

長夜の夢を覺まされて、江戸四里四方の老若男女、惡風來たりと
驚き騒ぎ、雨戸の横柄子緊乎と挿せ、辛張棒を強く張れ」と、家々ごと
に狼狽ゆるるを、可愼とも見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲音たけ〜しく、

鐵圍山
須彌山を中心と
した諸山の最外
園。
慘酷の矛、嗔恚
の劍の刃糞と彼
等をなしくれ
よ。

汝等人間を憚るな、汝等人間に憚られよ。人間は我等を輕んじたり、久しく我等を卑しみたり。我等に捧ぐべき筈の定め、の性を忘れたり。這ふ代りとして立つて行く狗驕奢の埒、巢作れる禽、尻尾なき猿、物言ふ蛇、露誠實なき狐の子、汚穢を知らざる豕の女、彼等に長く侮られて、遂に何時まで忍び得ん。我等を長く侮らせて、彼等を何時まで誇らすべき。忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだけ誇らしたり。我等を縛せし機運の鐵鎖、我等を囚へし慈忍の岩窟は、我が神力にて扯斷り棄てたり、崩潰させたり。汝等暴れよ。今こそ暴れよ。何十年の恨の毒氣を彼等に返せ、一時に返せ。彼等が驕慢の氣の臭さを鐵圍山外に攫んで捨てよ。彼等の頭を地につかしめよ。無慈悲の斧の刃味の好さを、彼等が胸に試みよ。慘酷の矛、嗔恚の劍の刃糞と、彼等をなしくれよ。彼等が喉に氷を與へて、苦寒に怖れ顛かしめよ。彼等が膽に針を與へて、祕密の痛み

讚して後に：彼
等を笑へ。

根
親

無法に住して放
逸無慚、無理無
體に暴れ立て、進
め、立て、進め、進

に堪へざらしめよ。彼等が眼前に、彼等が生したる、多數の奢侈の子孫を殺して、玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶兒の家を奪ひぬ、汝等彼等の家を奪へや。彼等は蠶兒の智慧を笑ひぬ、汝等彼等の智慧を讚せよ。すべて彼等の巧みと思へる智慧を讚せよ。大と思へる意を讚せよ。美はしと自ら思へる情を讚せよ。協へりとなす理を讚せよ。剛しとなせる力を讚せよ。すべては我等の矛の餌なれば、劍の餌なれば、斧の餌なれば、讚して後に利器に餌ひ、よき餌を作りし彼等を笑へ。刪らるゝだけ彼等を刪れ。急に屠るな、刪り殺せ。活かしながら一枚々々皮を剥ぎ取れ、肉を剥ぎ取れ。彼等が心臓を鞠として蹴よ、荆棘をもて背を鞭てよ。歎息の呼氣、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、それらをすべて人間より取れ。残忍の外、快樂なし。酷烈ならずば、汝等疾く死ね。暴れよ、進めよ、無法に住して放逸無慚、無理無體に暴れ立て、暴れ立て、進

丑寅卯辰
今の午前二時、
四時、六時、八
時。

め進め。神とも戦へ、佛をも擲け。道理を壊つて壊りすてなば、天下は我等がものなるぞ」と叱咤する度、土石を飛ばして、丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも、毫も止まず勵まし立つれば、數萬の眷族勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に黄ばまして、日の光をもほと／＼掩ひ、斧を揮つて、數寄者が手入れ怠りなき松を、冷笑ひつゝ、ほつきと斫るあり。矛を舞はして板屋根に忽ち穴を穿つもあり。ゆさ／＼と怪力もて、さも堅固なる家を動かし、橋を揺がすものもあり。「手ぬるし、手ぬるし、酷さが足らぬ、我に続け」と憤怒の牙噛み鳴らしつゝ、夜叉王の躍り上つて焦躁てば、虚空に充ち満ちたる眷屬をたけび鋭くをめき叫んで、遮二無二暴威を揮ふ程に、神前寺内に立てる樹も、富家の庭に養はれし樹も、聲振り絞つて泣き悲しみ、見る／＼大地の髪の毛は、恐怖に一々豎立なし、柳は倒れ竹は割るゝ、折しも黒雲

檜の實より大き
なる雨。

唯一揉みに屑屋
を飛ばし、一揉
み揉んでは二階
を捻ぢ取り、三
たび揉んでは

狼藉のあらん限
りを逞しうす。

空に流れて、檜の實よりも大きな雨ばらり／＼と降り出せば、得たりと益、暴るゝ夜叉、垣を引捨て、塀を蹴倒し、門をも破し、屋根をもめくり、軒端の瓦を踏み碎き、唯一揉みに屑屋を飛ばし、二揉み揉んでは二階を捻ぢ取り、三たび揉んでは某寺を物の見事に潰し崩し、どう／＼どつと関をあぐる、その度毎に、心を冷し、胸を騒がす人々の、彼に氣づかひ、此に案ずる笑止の様を見れば、居所さへも無くされて、悲しむものを見ては喜ぶ、八百八町



一一五重塔

頂上の寶珠は空に得讀めぬ字を書き

寛怠
あれ／＼危し、また撓んだは

百萬の人皆生ける心地せず、顔色更にあらばこそ。中にも分けて驚きしは圓道、爲右衛門、折角僅かに出來上りし五重塔は揉まれ揉まれて、九輪は動き、頂上の寶珠は空に得讀めぬ字を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り、楯をも貫ぬくべき雨の打付り來る度、撓む姿、木の軋る音、復る姿、また撓む姿、軋る音、今にも傾覆らんず様子に、あれ／＼危し、仕様はなきか、傾覆られては大事なり、止むる術もなきことか、雨さへ加り來りし上、周圍に樹木もあらざれば、未曾有の風に、基礎狭くて丈のみ高きこの塔の堪へんことの覺束なし。本堂さへもこれ程に動けば、塔は如何ばかりぞ。風を止むる呪文はきかぬか。かく恐しき大暴風雨に、見舞に來べき源太は見えぬか。まだ新しき出入なりとて重々來ては、叶はざる十兵衛見えぬが寛怠なり。他さへ斯程氣づかふに己が爲し塔氣にかけぬか。あれ／＼危し、また撓んだは。誰か十兵衛招びに行け、といへども、

河井醉茗
詩人
名は又平
大阪府堺の人
明治七年生

澆季の世。

一二塔 影

河井 醉茗

天に瓦飛び、板飛び、地上に砂利の舞ふ中を行かんといふものなく、漸く褒美の金に飽かして掃除人の七藏爺を出しやりぬ。〔五重塔〕

墨繩ただす番匠が、
掌の上につくられて、
朝狭霧の晴れゆけば、
寶珠を天に捧げ持ち、
岸に聳ゆる五層塔。
藏めし經も蠹みて、
供養忘れし澆季の世の、
雲をさへぎる勾欄に、

清き匏の痕見れば、
塵に氣韻も残るかな。

秋は露盤に露うけて、
扉は神祕に閉されぬ。
四天の神に守護られて
金輪際に根を埋め、
夜は北斗をうかがへり。

家に住まざる山鳩の
巢くふに所得たればか、
虚空杳かに翔れども
畫棟の朱の古びたる

四天の神。

金輪際。

畫棟の朱。

浮圖を慕うて歸るらん。

落暉は西に傾いて、
五重の屋根の歴然に、
重なりうつる草の上、
月は廂に浮かび出で、
九輪の影は水に在り。

雲の崖より吹き落ちて、
風湖を拭ひ去る、
波の面に刻まれし、
アートの花に咲きちらふ、
時の力の遠きかな。

九輪の影。

その世に媚びし歌反古は、
 曆の嵐に破れたり。
 生命の岸を下に見て、
 天に呼吸する塔の
 高き姿を水に見よ。

一三 織田信長論

中村孝也

中村孝也
 歴史家
 文學博士
 東京帝國大學助
 教授、史料編纂
 官
 群馬縣の人
 明治十八年生
 尊敬の情と、遺
 憾の念と交、胸
 裡に徂徠す。

本能寺の變は忽然として織田氏の覇業を中斷せり。而して天
 下の形勢はこれより急轉直下して、新たに別箇の英雄を躍出せし
 めたり。故に余はこの事變を以て安土時代の終焉と認むるを適
 當なりと思惟す。かく前代の終焉を見送りて、靜かに信長の人物
 を思ふに、尊敬の情と、遺憾の念と、交、胸裡に徂徠するものあるを覺

炯々たる眼光、
 一見して人を懼
 伏せしむる趣あ
 らざりしなら
 ん。

磊落粗豪、

三間
 約五メートル
 半。

傍若無人。

時代思潮の權
 化。

ゆ。これについていさゝか論ずる處あらん。

信長は大才なり。然れどもその大才たるや、亂世の英雄たるに
 適して、治世の名將たるに適せざりき。顧ふに信長は、その肥滿せ
 る身體、孱弱なる筋骨より推すに、恐らくは炯々たる眼光、一見して
 人を懼伏せしむる趣あらざりしならん。然れどもその人となり
 の勇猛、強忍、英邁、果斷、しかも豪膽にして、機才縱横なる處、明らか
 に彼の性格の奮闘的なることを想見せしむるものあり。彼は年少
 にして磊落粗豪なりき。彼は頭に茶筌鬘を戴き、鮮かなる紅絲を
 以てこれを結び、朱鞘の大小を帯びて路上に果實を食へり。三間
 柄の長槍を提げて馬を飛ばし、游泳を以て一年の半ばを送れり。
 父信秀の葬儀に香を擲んで爐中に擲ち、その傍若無人の振舞は、遂
 に平手政秀をして憂憤諫死せしむるに至れり。かくの如き奮闘
 的性格は、まさに時代思潮の權化ともいふべきものなり。時代に

遠交近攻。
内線作戰。

精神あり、具體化して一箇の人格を生ず。その人格が時代の成功者となるは時運の必然ともいふべし。思ふに彼が成功の原因としては、濃尾の平原が京師に近きこと、平原の物質に豊富なること、



織田信長

大なる勢力が上洛の途上に存せざりしこと、遠交近攻の政策と周囲の敵に對する内線作戰とが適當なる境遇の下に行はれたること等を數ふべしと雖も、

したる處に存すること疑ふべからず。彼が成功の根本原因はこゝにあり、されど失敗の原因もまたここに存せり。凡そ社會は一箇の活物にして、その精神思潮は歲月

は、彼の性格が時代の要求に合

建勳神社。

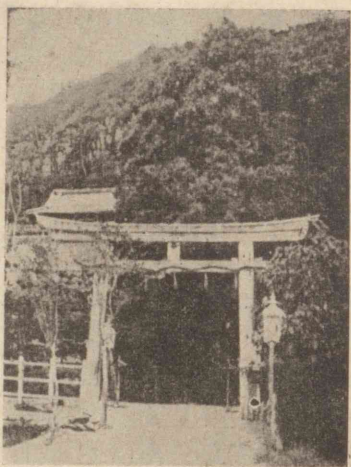
織田信長を祀り、京都船岡山にあり。別格官幣社。

亂世の英雄。

骨肉を殺して尾張を定め、舅家を欺いて美濃を定め、妹婿を窘めて近江を定め、將軍を逐ひて京畿を定む。

颯爽たる雄姿。寛々たる高風。

と共に變化するものなり。而して箇人の性格をしてこれに伴なひて變化しゆかしむれば則ち可なり、苟もその性格にして變化することを得ざらんか、誰かその早晚世と背離して、失脚することなきを保せんや。



建勳しき多くの奮闘的素質を有したり神き。この素質は、彼をしてよく骨肉を殺して尾張を定め、舅家を欺いて美濃を定め、妹婿を窘めて近江を定

め、將軍を逐ひて京畿を定めしめたり。而してこの素質は、彼に權力主義を發揮せしむることに興りて大いに力ありきと雖も、彼をして雍々たる王者の風を備へしむること能はざりき。彼は颯爽たる項羽の雄姿を具へたりき、然れども同時に寛々たる劉邦の高

居然として天下に號令せん。

彼の將來は豈洋洋たりといふべけんや。

撥亂反正。

風を缺きたりき。かるが故に彼の性格は近畿に於ける惡戰苦闘には適したりと雖も、居然として天下に號令せんと欲せば、更に別箇の修養を積まざるべからざりき。而して彼が光秀に對する峻酷は、まさしく彼の修養のこゝに及ばざりしことを證明するものにあらずや。時代は開展し來りぬ。しかも彼の性格がこれに應じて別箇の面目を開展せざる限り、彼は終に長く時代の寵兒たるべからず。勢かくの如くんば、たとひ光秀なしとするも、彼の將來は豈洋々たりといふべけんや。蓋し天の作せる^{ついで}孽は猶ほ違るべしと雖も、自ら作せる孽は遠くべからざるが故なり。

かるが故に、余は信長の偉大を讚することに於て人後に落ちずと雖も、その死せるや、當に死すべき時を以て死したることを思ふ。凡そ絶大なる事業は、一箇特異の人格のみを以て完成し得べきものにあらざ。而して信長は、奮闘的性格を以て撥亂反正の方面を

一身よく世變の樞機となる。

擔當せるものなり。その方面の業略緒に就かば、これを繼承して大成せしむるには、更に他の雄大豪爽なる人格を必要とすべし。羽柴秀吉はこの種の人にして、天下統一の大事業は即ち彼の手によりて成就せられたるなり。これ余が信長の死を目して適當なる最期と稱する所以、何ぞ必ずしも深く哀惜するを須るんや。然りと雖も、彼先づ出でざりせば、秀吉家康のついで現るゝこと容易に期すべからず。一身よく世變の樞機となる。彼もまた人傑なるかな。

一四 古今集より

在原業平

おほかたは月をもめでじこれぞこの
つもれば人の老となるもの

在原業平
阿保親王の五男
六歌仙の一人
元慶四年(五四〇)
歿、年五十六

遍昭

六歌仙の一人
俗名良峯宗真
寛平二年(二五〇)
寂、年七十六

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

なにかは露を玉とあざむく

大伴黒主

春雨の降るは涙かさくら花

ちるを惜しまぬ人しなれば

紀貫之

今年より春知りそむる櫻花

散るといふことは習はざらなむ

さくら花咲きにけらしも足曳の

山の峽かみより見ゆるしらくも

凡河内躬恆

春の夜の闇はあやなし梅の花

紀貫之

三十六歌仙の一人
古今集の撰者の
随一

土佐日記の著者
天慶九年(二六〇)
歿、年六十五

凡河内躬恆

古今集の撰者
延喜七年(二五七)
歿、年四十九

壬生忠岑

古今集の撰者
康保二年(二六五)
歿、年九十六

色こそ見えね香やは隠るる

壬生忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ

鹿の啼くねに目をさましつつ

藤原良房

古今倭語集卷第五

秋哥下

これこそ秋の香は隠るる
山里は秋こそことにわびしけれ
鹿の啼くねに目をさましつつ

年ふれば齡は老いぬ
しかはあれど
花をし見れば
物おもひもなし

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

大江千里

藤原敏行

歌人、書家
光孝、宇多、醍
醐の三天皇に仕
へた人
延喜七年(二五七)
歿

大江千里

歌人
參議音人の子
延喜頃の人

素性

三十六歌仙の一

俗姓良峯支利

清和天皇より醍

醐天皇の御代の

人

藤原興風

三十六歌仙の一

俗姓良峯支利

清和天皇より醍

醐天皇の御代の

人

鶯の谷よりいづるこゑなくば

春くることをたれか知らまし

素性

もみぢ葉のながれてとまる湊には

くれなるふかき波やたつらむ

藤原興風

聲絶えず啼けや鶯ひととせに

ふたたびとだに來べき春かは

詠人知らず

木の間より洩り來る月のかげみれば

心づくしの秋は來にけり

坂上是則

もみぢ葉の流れざりせば龍田川

坂上是則
三十六歌仙の一
延長八年(二五九〇)
歿

みづの秋をばたれか知らまし

一五 船 旅

紀 貫 之

紀 貫之

前出(三頁)

その年

朱雀天皇の承平
四年(二五九四)

男もすといふ日記といふものを、女もしてこゝろみむとてする
なり。その年十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出
す。そのよしいさゝか物に書きつく。

ある人、縣の四年五年はてて、例の事ども皆し終へて、解由など取
りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へわたる。かれこれ知る
知らぬ送りす。年頃よく具しつる人々なむ、別れ難く思ひて、頻り
にとかくしつゝ、罵るうちに夜ふけぬ。

七日になりぬ。同じ港にあり。今日破子もたせて來たる人、そ
の名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふこゝろあり

かれこれ知る知
らぬ送りす。

七日

承平五年正月。

同じ港

大湊のこと。高
知縣長岡郡。

てなりけり。とかくいひく／＼て浪の立つなることと憂へいひて詠める歌、

ゆくさきに立つ白浪の聲よりも

おくれて泣かむわれやまさらむ

とぞよめる。いと大聲なるべし。持てくる物

より、歌はいかゞあらむ。



紀貫之 (岩佐又衛筆)

る人の子の童なる密かにいふ「まろ、この歌の返しせむ」といふ。驚きて「いとをかしき事かな。詠みてむやは。詠みつくは、はやい

へかし」といふ。「罷らずとて立ちぬる人を待ちて詠まむ」とて求めるを、夜更けぬとにや、やがて往にけり。「抑もいかゞ詠んだると、いぶかしがりて問ふ。この童さすがに恥ぢていはず。強ひて問へば、いへる歌、

ゆく人もとまるも袖の涙川

みぎはのみこそぬれまさりけれ

となむ詠める。かくはいふものか。愛しければにやあらむ。いと思はずなり。童言にては何かせむ。媼翁にをしつべし。悪しくもあれ、いかにもあれ、便りあらば遣らむとておかれぬめり。

二十日。昨日のやうなれば、船いださず。皆人々憂へ歎く。苦しく心もとなければ、たゞ日の経ぬる數を、今日いくか、二十日、三十日と數ふれば、指もそこなはれぬべし。いとわびし。いも寝ず。

かくはいふものか。愛しければにやあらむ。いと思はずなり。

馬のはなむけ。

月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。

二十日の月出でてにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出て来る。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲鷹といひける人は、唐土に渡りて、歸り來ける時に、船に乗るべき所にて、かの國人馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの詩つくりなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見て、仲鷹のぬし、「我が國には、かゝる歌をなむ、神代より神も詠んたび、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、悦びもあり、悲しみもある時には詠むとて、よめりける歌、あをうな原ふりさけ見れば春日なる



安倍の仲鷹

通譯

小津
今は大津といふ。大阪府泉北郡岸和田市の東北。

三笠の山にいでし月かもとぞ詠めりける。かの國人聞き知るまじうおもほえたれども、事のこゝろを男文字にさまを書き出して、こゝの詞傳へたる人、いひ知らせければ、意をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ愛でける。唐土とこの國とは、ことば異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

二月五日、けふ辛くして、和泉の灘より、小津のとまりをおふ。松原目もはるく、なり。これかれ苦しければ、詠める歌。行けどなほゆきやられぬは妹がらむ

をつの浦なる岸の松原

かくいひつゞくる程に、船とくこげ、日の好きに、と催せば、織取船子どもにいはく、「御船より仰せたふなり、あさぎたの出で來ぬさきに、

挿圖の文
本文次頁「かく
いひて眺めつゞ
くる」の「くる」
以下。

記 日 佐 土

「今日浪な立ちそ」と、人々終日
に祈るしるしありて、風浪た
ず。今し鷗むれゐて遊ぶとこ
ろあり。京の近づくよろこび
の餘りに、ある童のよめる歌、

祈りくる風間と思ふをあやなくも
かもめさへだに波と見ゆらむ

しぞきにしぞき
て、ほと／＼し
くうちはめつべ
し。

「ほしき物ぞお
はすらむ」とは
今めくものか。
「さて幣をたて
まつり給へ。」

かくいひて眺めつゞくる間に、ゆくりなく風吹きて、こげどもこ
げども尻へしぞきにしぞきて、ほと／＼しくうちはめつべし。 櫂
取のいはく、「この住吉の明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞおは
すらむ。」とは今めくものか。「さて幣をたてまつり給へ。」といふ。
いふに従ひて、幣奉る。かく奉れどもはら風やまで、いや吹きにい
や立ちに、風浪の危ければ、櫂取またいはく、「幣には御心のいかねば、
御船も行かぬなり。なほうれしと思ひ給ふべき物奉りたべ。」とい
ふ。またいふに従ひて、「いかゞはせむ」とて、眼もこそ二つあれ、たゞ
一つある鏡を奉る。とて、海にうちはめつれば、くちをし。さればう
ちつけに、海は鏡のおもてのごとなりぬれば、ある人のよめる歌、
ちはやぶる神の心のあるる海に
鏡を入れてかつ見つるかな
いたく、住の江、忘れ草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目も

土佐日記

承平四年十二月
二十一日土佐出
發より翌五年二
月十六日京に着
くまでの紀行

近松半二

淨瑠璃作者 大
阪の人 天明三
年(四四)歿
年五十九

補陀落や云々

西國三十三所巡
禮札所の第一
番、和歌山縣那
智山青岸渡寺の
御詠歌。

故里を云々

同第二番、和歌
山縣紀三井山護
國院金剛寶寺の
御詠歌。

やうく、とほ
くの。

はるく、こゝに
紀三井寺。

うつらく、鏡に神の心をこそは見つれ。 楳取の心は、神の御心な
りけり。

那智

一六 阿波鳴門

近松 半二

〔土佐日記〕

「補陀落や、岸打つ波は三熊野の、那智のお山に響くたきつ瀬。」年
はやうく、とほくの、道をかけたる笈摺に、同行二人」と記せしは、
一人は大悲の蔭頼む、故郷を遙々こゝに紀三井寺、花の都も近くな
るらむ。「巡禮に御報謝。」と言ふも優しき國訛。「ても、しをらしい巡
禮衆。どれく報謝進ぜう。」と、益に精げの志。「あい、有難うご
ざります。」と言ふ物越から爪はづれ、可愛らしい娘の子。定めて連
衆は親御達、國は何處。」と尋ねられ、「あい、國は阿波の徳島でござりま
す。」む、何ぢや、徳島。さつても、それはまあ懐かしい。私が生れ
も阿波の徳島。そして父様と母様と、一緒に巡禮さんすのか。「い

えいえ、その父様や母様に逢ひたさ故、それで私一人西國するので
ござります。」と、聞いてどうやら氣にかゝる。

お弓は猶も傍に寄り、む、父様や母様に逢ひたさに、西國すると
はまあどうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、其の親達の名は
何といふぞいの。「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に父様
や母様も、私を祖母様に預けて、何處へやら行かしやんしたげな。
それで、私は祖母様の世話になつてゐたけれど、どうぞ父様や母様
に逢ひたい、顔見たい。それで方々と、尋ねて歩くのでござります。
父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と、聞いて吃驚
お弓は取付き、これく、あの父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つ
の年別れて、祖母様に育てられてゐたとは、疑もない我が娘と、見れ
ば見る程稚顔、見覚えのある額の黒子。「やれ、我が子か、懐かしや」と、
言はむとせしが、いや待て暫し。夫婦は今にも取らるゝ命、素より

覺悟の身なれども、親子と言はばこの子にまで、どんな憂き目がかからうやら。それを思へば生中なまなかに、名のりだてして憂き目を見むより、名のらでこの儘返すのが、却つてこの子の爲ならむと、心を静め、よそしくしくおしく、それはまあ、年端としはも行かぬに遙々の處を、よう尋ねに出さしやつたなう。その親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて嬉しうて、飛立つやうにあらうが、儘ならぬのが世の憂き節、身にも命にも代へて可愛い子を振棄てて、國を立退く親御の心、よくよくの事であらう程に、酷ひどい親と必ず、恨まぬがよいぞや。「いえ、勿體ない。何の恨みませう。恨むることはいけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘處よその子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、私も母様があるなら、あのやうに髪結うて貰ふものと、羨しうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、そ

れが悲しうござんす。」と、泣いじやくりするいぢらしさ。

母は心も消入る思。「さて、世の中に、親となり子と生るゝ程、深い縁えんはなければ、親が死んだり子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方こなたもどれ程尋ねても、顔も處も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮しない事。もう尋ねずと、國へ去いんだがよいわいの。」いえ、戀しい父様や母様、假令たとひ何時まで懸つてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやて、何處の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては擲たかれたり、怖おそい事や悲しい事。父様や母様と一緒にゐたりや、こんな目に逢ふまいものを。何處にどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや、逢ひたい。と、わつと泣出す娘より、見る母親は堪りかね、お、道理ぢや。可愛や、いぢらしや。」と、我を忘れて抱きつき、前後正體歎なげきしが、これ程親を慕ふ子を、何とこの儘まま去いなされう。いつそ打明け名のらうか。

尋ねう(よう)

て(と)て

前後正體歎なげきしが。

しやうど
目あてとする
處。

む(も)

御家様
主婦の敬稱。

いや、それではこの子も同じ罪。その時の悲しさを思ひ廻はせば去なすが爲と、お、段々の様子を聞きわが身のやうに思はれて、悲しいとも、情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさへ居りや、また逢はれまいものでもない。これ、しつけぬ旅に身を痛め、思ひでも出りや悪い。何處をしやうどに尋ねより、その祖母様の方へ去んで居るとの、追附おつけ父様や母様が逢ひに行てぢや程に、悪い事は言はぬ。思ひ直してこれから直ぐに國へ去んで、随分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と、宥めすかすを聞分けて、あいあい、忝うござります。お前がそのやうに言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思はれて、私わいや此處が去にとむない。どんな事なと致しませう程に、もうし御家様ごけさま、お前の傍に何時までも、私わいを置いて下さりませ。」え、悲しい事を言出して、又泣かすのかいの。先さきにから

内へ針箱の底を
探して豆板のま
めなを悦ぶ餞
別。
豆板
昔の銀貨。豆銀
ともいふ。

私わいも子のやうに思うて、此處に置きたい、去なしとむないと、様々思ひ廻はせども、此處に置いてはどうも爲にならぬ事があるによつて、それでつれなう去なすのぢや程に、聞分けて去んだがよいぞや。」と言ひつゝ、内へ針箱の底を探して豆板のまめなを悦ぶ餞別せんべつと、紙に包んで持つて出で、これ、何ぼ一人旅でも、たとと錢さへありや泊める。僅かなれども志、この銀かねを路銀にして、早う國へ去にや。必ず必ず思うてばしたもんな。」と、銀を渡せば押戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、たとと持つて居ります。そんなりや、もう参じます。忝うござります。」と泣く、立つを引留め、それはさうでも、これは私わいが志。」と無理に持たして塵うち拂ひ、これ、もう去にやるか。名残が惜しい、別れとむない。これ今一度顔を。」と引寄せ、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思。それと知らねど、誠の血筋、名残惜しげに振返り、何處をどうして尋ねたら、父様ちちさまや母様ははさまに

父母の恵も深き粉河寺。

西國三十三所巡禮札所の第三番。和歌山縣補陀落山施音寺(粉河寺)の御詠歌。

西田幾多郎

哲學者 文學博士 京都帝國大學名譽教授

東圃

藤岡作太郎の雅號、國文學者、文學博士、金澤の人、

明治四十三年歿年四十一

昨年

明治三十九年。

逢はれる事ぞ。逢はしてたゞ、南無大悲の觀音様。父母の恵も深き粉河寺、佛の誓頼もしきかな。泣くく、別れ行く……

〔傾城阿波鳴門〕

一七 親 心

西田幾多郎

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸郷された時に會つたら君は光子といふ女の子を連れてゐた。愛らしい生き生きとした子であつたが、昨年夏、君が小田原に寓居してゐる間に、意外にもこの子を失はれたので、余は前年旅順で戦死した余の弟の事など思ひ浮べて、力を盡して君を慰めた。然るに、何ぞ圖らむ、今年一月、余は漸く六つになつた己が次女を亡くして、却つて君から慰められる身とならうとは。

東圃君の宅

當時東圃は東京帝國大學文科大學助教授で、東京市本郷區西片町に住んでゐた。

弔一品

文學史

國文學史講話 明治四十一年發行

今年の春、十年餘も足を帝都に踏入れなかつた余が、思ひがけなくも、或用事の爲に東京に出るやうになつた。著くや否や、東圃君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である。殊に今度は同じ悲しみを抱きながら、久しぶりで相見たのである。單に何時もの舊友に逢ふといふ心持のみではなかつた。然るに、手紙では互に慰め合つてゐながら、面と向つては何の言葉も出ず、たゞ軽く弔辭を交換しただけであつた。逗留七日、積る話は盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。たゞ余の出立の朝、君は篋底を探つて一束の草稿を余に示し、亡兒の終焉記であると言つた。かつ、今度出版すべき文學史を亡兒の記念としたいから、余にも何か書き添へてくれと言はれた。君と余と相逢うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れてゐたのではない。又、堪へ難い悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新たにするに忍びな

つたのでもない。誠といふものは、言語に表はし得べきものではない。言語に表はし得べきものは、凡て淺薄である。至誠は却つて相見ても相言ふ能はざる所に存する。我等が相對して相言ふことの出來なかつた所に、言語はおろか、涙にも表はすことの出來ない、深い同情の流が、互の心の底から底へと通つてゐたのである。

余はわが子を亡くした時に、深い悲哀の念に堪へなかつた。特に、この悲しみも年と共に消えて行くのかと思へば、如何にも淺ましく、せめて後の思出にもと、死んだ兒の面影を書き残した。さうして、直に之を東圃君に送つた。當時、眞に余の心を知つてくれる友は、君の外にないと思つたからである。然るに、何ぞ圖らむ、君は余よりも前に同じ境遇に會つて、同じ事を企ててゐられたのである。余は、別れに臨んで君の送られた一束の草稿を行李の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに取出して詳かに讀んだ。讀終

同じ盤上に同じ球を同じ方向に突けば、同様の行路を辿る如くに、余の心は君の心の如くに、働いたのである。

敵壘深く屍を委して。

收納、修治

つて、人心の誠はかくまでに同じものかとつくゞ感じた。誰か人心に定法なしといふ。同じ盤上に同じ球を同じ方向に突けば同様の行路を辿る如くに、余の心は君の心の如くに働いたのである。

回顧すれば、余の十四歳の時、余は幼時最も親しかつた余の姉を失つた。余は、その時生れて始めて、死別の如何に悲しいかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、又母の悲哀を見るに忍びず、人の居ない處に行つて、思ふさま泣いた。幼心に、若し余が姉に代つて死に得るものならばと、心から思つたことを今も記憶してゐる。近くは、悲壯な旅順の戦に、只一人の弟が敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得なかつたので、こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思は未だ全く消え失せないのに、今又己が愛兒の一人を失つたのである。骨肉の情、いづれ疎なるはない。けれども、特に親子の

情は格別である。余はこの度、生來未だ曾て知らなかつた沈痛な經驗を得たのである。余はわが心から推して、一々君の心を讀むことが出來た。君の亡くされたのは、君の初兒はつこであつた。初兒は親の愛を專にするのが世の常である。特に幼い女の子は、堪らない位に可愛いとのことである。情愛の濃やかな君にして、この子を失はれた時の感情は如何であつたらう。

亡きわが兒の可愛いといふのは、何の理由もない。たゞ譯もなく可愛いのである。甘い物は甘い、辛い物は辛いと言ふの外はない。「これまでにして亡くしたのは惜しからう。」と言つて悔んでくれる人もある。併し、かういふ意味で惜しいのではない。「女の子で好かつた。」とか、「外に子供もあるのだから。」とか言つて慰めてくれる人もある。併し、かういふ事で慰められよう筈もない。親の愛は實に純粹である。その間一毫も利害得失の念を挟む餘地はない。

い。たゞ亡兒の佛を思ひ出すにつれて無限になつかしく、かはいさうで、どうにかして生きてゐてくれ、ばよかつたと思ふのみである。若い人も老いた人も、死ぬるのは人生の常である。死んだのはわが子ばかりではない。かう思へば、理に於ては我一人悲しむべきではない。併し、人生の常事であつても、悲しい事は悲しい。

人は「死んだ者は如何に言つても還らぬから、諦めよ、忘れよ。」と言ふ。併し、これが親に取つては堪へ難い苦痛である。時は總べての傷を癒やすといふのは自然の恵であつて、一方から見れば大切な事でもあらうが、他方から見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を遺して遣りたい、せめてわが一生だけは思ひ出して遣りたいと思ふのが親の誠である。昔、君と机を並べてワシントン・アーピングのスケッチブックを讀んだ時、他の

時は總べての傷を癒やす。

アーピング
アメリカの文學者。
(西曆一七三
一六五)
スケッチブック
短篇小説集の名。

藉籍

心の疵や苦しみは、これを忘れ、これを治さうと思ふが、獨り死別といふ心の疵は、人目を避けてもこれを温め、これを抱かうと思ふ。といふ一節があつた。今こそ眞にこの語が思ひ合はされる。折に觸れ、物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉であり、死者に對しての心盡しである。この悲しみは、苦痛と言へば眞に苦痛であるが、親はこの苦痛の去る事を欲しないのである。

死にし子云々

「土佐日記」に見

える句。

古人

紀貫之を指す。

癡(痴)

カント

ドイツの哲學者。(西曆一七四

一八〇四)

「死にし子顔よかりき。をんな子のためには親をさなくなりぬべし。」と古人も記してあるやうに、親の愛は眞に愚癡である。冷靜に外から見たならば、たわいない愚癡と思はれるであらう。併し、余は今度こそ人間の愚癡の中に、人情の味のあることを悟つた。カントが言つた如く、物には皆値段がある。獨り人間は値段以上である。如何に貴重な物でも、それはたゞ人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴いものはない。物はこれを償ふ

ゲーテ
ドイツの文學者。(西曆一七四九

一八三三)

高く構へて。

征馬云々

「金州城作」と題した詩の後半である。その前半は、「山川草木轉荒涼、十里風腥新戰場。」

ことが出来るが、如何に詰らぬ人間でも、一つの靈魂は他の物を以て償ふことは出来ない。さうして、この人間の絶對的價值といふことが、わが兒を失つたやうな場合に、最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテはその兒を失つた時、死を越えて、と言つて仕事を續けたと言ふ。ゲーテにしてこの語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたであらうが、人間の仕事は人情を離れて外に目的があるのであるのではない。學問も事業も、究極の目的は人情のためにするのである。さうして人情といへば、假令小なりとは言へ、親が子を思ふよりも痛切なものなからう。徒に高く構へて、人情自然の美を忘れる者は、却つてその性情の卑しいことを示すに過ぎない。「征馬、不前人、不語、金州城外立斜陽。」の句があつて、乃木將軍の人格は益、仰がれるのである。

とにかく、余は今度わが兒の儚ない死によつて、多大の教訓を得

た。名利を追うて煩悶絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられたやうな心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥から秋の日のやうな清らかな光が照らして、總べての人の上に純粋な愛を感じることが出来た。

物窮まれば轉ずる。親が子の死を悲しむといふ如き、遣瀨なき悲哀、悔恨は、おのづから人心を轉じて、何等かの慰安の途を求めしめるのである。夏草の上に置ける朝露よりも儂ない一生を送つたわが兒の上を思へば、如何にも斷腸の思がする。併し、翻つて考へて見ると、兒の死を悲しむ余も、遠からず同じ運命に服従しなればならない。悲しむものも、悲しまれるものも、同じ青山の土塊と化して行く。生れて何等の發展もなさず、何等の記憶も遺さず、死んだとて悲しんでくれる人だにないと思へば、あはれと言へば眞にあはれである。併し、如何なる英雄も、嬰兒も、死に對しては何

等の意味ももたない。泰西名畫の一つに、死の神が老若男女さまざまの階級の人々を捕へ來つて、王者も乞食も悉く一堆の中に積重ねてゐるのを見たことがある。眞に、榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない。又、世の中の幸福といふ點から見ても、生延びたのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか。生きてゐたらば幸であつたらうといふのは親の欲望であつて、運命の祕密は我々には分らない。一方から見れば、生れて何等の罪惡にも汚れず、何等の悲哀をも知らず、たゞ日々嬉戲して、最後に父母の膝を枕として死んで行つたのは、非常に美しい感じがする。花束を散らしたやうな、詩的な一生であつたとも思はれる。假令多くの人に記憶せられず惜しまれずとも、懐しい親の心に刻んだ深い記念、骨にも徹する痛切な悲哀は、寂しい死をも慰め得て餘があるとも思ふ。

凡そどんな人も、わが兒の死といふやうな事に際しては、種々の迷を起さないものはなからう。あれをしたら好かつたらう、これをしたら好かつたらうなどと思つて、返らない事ながら、徒な後悔の念に心を悩ますのである。併し、何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく、内からも働く。我々の過失の背後には、不可思議の力が支配してゐるやうである。後悔の念の起るのは、自己の力を信じ過ぎるからである。我々は、かゝる場合に於て、深く自己の無力なるを知り、己を棄てて絶大の力に歸依すれば、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如く、自らを救ひ、又死者に詫びることが出来る。かくしてこそ、歎異鈔に「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてや侍るらむ、また地獄に墮つべき業にてや侍るらむ。總じててもて存知せざるなり」とある尊い信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に接することが出来るのである。

懺(懺)

歎異鈔
親鸞上人の言葉
を筆録したも
の。編者は親鸞
の弟子如信であ
るといふ。

爲朝

源爲義の第八子。嘉應二年(一一三〇)大島で自殺。年三十二。

保元物語

保元の亂(保元元年、一一八三)を中心とした軍記物語。大納言葉室時長の作といはれるが、詳かでない。

新院

崇徳上皇。

左府

左大臣藤原賴長。保元元年敗死。年三十七。

爲義

義朝の父。保元元年(一一八三)死。年六十二。

來るのである。

〔思索と體驗〕

齋院
上賀茂下賀茂兩神社に奉任する旨
一八 音に聞ゆる爲朝

〔保元物語〕

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にてまゐり給ふ。白河殿より北河原より東春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平馬、助忠正承つて、父子五人並びに多田藏人大夫賴憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。その勢百騎許りには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に付きて、多分は内裏へ參りけり。爰に鎮西八郎爲朝は、我は親にも連れまじ、兄にも具すまじ、高名不覺も紛れぬやうに、唯一人いかに強からん方へ差向け給へ。たとひ千騎も

義朝
平治元年(八五九)
平治の亂を起
し、翌永曆元年
(二〇三)家臣の手
にかゝりて死
す。年三十八。

大力の強弓、矢
繼早の手きゝな
り。

四寸
今の十二センチ
ばかり。

あれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなりとぞ申しける。依つて西河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞えし。抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に越え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢繼早の手きゝなり。弓手の肘、馬手に四寸伸びて、矢束を引くこと世に越えたり。幼少より不敵にして、兄にも所をおかず、傍若無人なりしかば、身にそへて都に置きなば、悪しかりなんとて、父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに、豊後國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後國阿曾、平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿になつて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へんとしければ、菊池原田を始として、所々に城を構へて、楯籠れば、その儀ならば、いで落して見せんとして、未だ勢もつかざるに、忠國

香椎宮
福岡縣糟屋郡香
椎村、神功皇后
を祀る。
久壽元年
(一一八四)

親の科に當り給
ふらんこそあさ
ましけれ。

ばかりを案内者として、十三の歳の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀敵を打つ術人に勝れて、三年が内に九國を皆攻め落して、自ら總追捕使に押しなりて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等、都に上り訴へ申す間、往にし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて、宣旨を下さる。
源、爲朝、久住、宰府、忽、諸朝憲、咸背、綸言、梟惡、頻聞、狼藉、尤甚、早可、令禁、進其身、依、宣旨、執達、如、件。
然れども爲朝猶ほ參洛せざりければ、同二年四月三日、父爲義を解官せられて、前、檢非違使になされけり。爲朝これを聞きて、親の科に當り給ふらんこそあさましけれ、その儀ならば、我こそ如何なる罪科にも行はれんずとて、急ぎ上りければ、國人どもも上洛すべき由申しければ、大勢にて罷り上らんこと、上聞穩便ならずとて、形

三町礫
小石を投れば三町(遠くへといふ義)も飛ぶといはれる程の名入。三町は今の約三百二十七メートル。

七尺
一尺は約三十七センチ。



朝西郷隆盛(筆)

の如くに付き従ふ兵ばかり召具しけり。乳母子の箭前拂の須藤九郎家季、その兄透間數の悪七別當、手取の與次、同與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦の二郎、左中次、吉田の兵衛、打手の紀八、高間の三郎、同四郎を始として、二十八騎ぞ具したりける。依りて去年より在京したりしを、父不孝を赦して、今度の御大事に召具しけるなり。
爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つきれたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを着

五寸
一寸は約三センチ。
樊噲
漢の高祖の臣。
張良
字は子房。戦略に長じて、高祖を助けた。
呉子孫子
周代の兵法家。
養由
周代の弓術家。
上皇
崇徳上皇。
音に聞ゆる爲朝
見んとてこぞり給ふ。

高松殿
假内裏、後白河天皇の御所。

るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて、鉞打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破ること、呉子孫子が難しとする處を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとてこぞり給ふ。
左府即ち合戦の趣計らひ申せと宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者共従へ候につきて、大小の合戦數を知らず。中にも折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を亡ぼすにも、皆利を得ること、夜討に如くこと侍らず。然れば唯今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず。矢を恐

主上の御方心にくくも候はず。

主上

後白河天皇

清盛などがへろへろ矢、何程の事か候べき。

行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に即け進らせんこと、掌を返す如くに候べし。

れん者は火を遁るべからず。主上の御方心にくくも候はず。但し兄にて候義朝などこそ懸け出でんずらめ。それも眞中差して射通し候ひなん。まして清盛などがへろへろ矢、何程のことか候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へならば、御免を蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃げ去り候はんずらん。その時爲朝まゐり向ひ、行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に即け進らせんこと、掌を返す如くに候べし。主上を迎へまゐらせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、いまだ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べきと、憚るところもなく申したりければ、左府、爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す處か。夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。かしこけれど皇家の御爲に源平數を盡くして、兩方において勝負を決せんに、無下に然

富家殿
頼長の父、關白
忠實。

るべからず。その上南都の衆徒を召さるゝことあり。興福寺の信實玄實等、吉野十津河の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉これへ參るべし。彼等を待ち調へて、合戦をば致すべし。また明日院司の公卿、殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ばば、残はなどか參らざるべき。と、仰せられければ、爲朝上には承伏申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝は武略の奥義を極めたる者なれば、さだめて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。唯今押寄せて風上に火を懸けたらんには、戦ふともいかでか利あらんや。敵勝に乗る程ならば、誰か一人安穩な

るべき、口惜しきことかなとぞ申しける。

一九才 藝

(『十訓抄』)

十訓抄
十箇條の目安の
下に多くの教訓
説話を分類して
集めたもの。建
長四年(一一三三)の
作。作者不詳。

氏をつがながた
め、道に至らん
がために、かれ
もこれも、共に
勵むべし。

雲泥の心地。
人目いみじく。

或人曰く、本よりその道々の家に生まれぬるはさることなり。
さなき類ひもほど／＼につけて、能は必ずあるべきなり。中にも
氏をうけたる者、藝おろかにして氏をつがぬ類ひあり、道にあらざ
る類ひ、能によりて道に至る徳もあれば、氏をつがながため、道に至
らんがために、かれもこれも、共に勵むべし。何となくおまじりた
る折は、そのけぢめ見えざれども、藝能につけて召しも出だされ、た
だうちある我れどちの遊にも、かたへに抜け出でて、何事をもした
らんは、雲泥の心地して、人目いみじく覚えぬべし。すべて、みめよ
く品高けれども、あやしく賤しきが、能あるに立ちならぶ折は、その
品、そのみめも、必ず思ひけたるゝものなり。たとへば、花のあたり

桃李は一旦の榮
華なり、松樹は
千年の貞木な
り。

箕裘の業。

大西祝
哲學者
文學博士
早稻田大學教授

の常磐木は、うち見るに、たとへなくさめたれども、春の日かざくれ、
峯の嵐過ぎたる後に、緑ばかり残りて、かりのにほひ留まらざるが
如し。されば桃李は一旦の榮華なり、松樹は千年の貞木なりとい
へり。いみじくありて身の能なきが、一人あるを見るだに、能ある
を思ひ出づる習なり。況んや能にならぶ折のけぢめをや。いか
に況んや同じやうなるが、一人は能ありて一人は能なきをや。中
にも世の中のかはり行くさま、昔よりは次第に衰へもて行くにつ
けつゝ、道々の藝能もまた父祖には及びがたき習なれば、藍よりも
青からんことはまことに稀なりといへども、形の如くなりとも箕
裘の業を繼がざらむ、口惜しかりぬべし。

二〇國民の覺悟

大西祝

世界の文明はこれを全體より觀察すれば、年を逐うて進歩し發

京都帝國大學教授
岡山市の人
明治三十三年
(三六〇)歿、年三十七

ユダヤ人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、ギリシヤ人は文學藝術を傳播するを以てその天職とし、ローマは世界の帝王を以て自ら任じたり。

展す。而して各國歴史の河流は遲速の別こそあれ、遂には世界歴史といふ一大海に朝宗する運命を有するなり。たゞその世界の文明に力を致すに於て、各國必ずしもその趣を一にせず。往昔ユダヤ人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、ギリシヤ人は文學藝術を傳播するを以てその天職とせり。ローマは世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受くる曉に於ても、なほ世界の帝王たる地位を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建てて精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。

近世の歐米人を見るに、英人は己が運命は海上權を掌握して、遠隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以てあらゆる方面に自主自由を發達せしむる舞臺となし、佛人は人間的の思想感情を世界に弘むるを以てその抱負とするが如し。

日本は世界の文明に對していかなる寄與をなすべきか。日本

識者先覺、
深思熟慮、

悟了。

滔々たる勢、
一日千秋。

國民は世界に對していかなる抱負を有すべきか。これ今日の識者先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の大事勢は日本人をしていかなる事を世界に宣傳せしめんとするか。大事勢は無聲無



形なり。識者先覺は大事勢を悟了し、大これをして聲あらしめ形あらしめ西ざるべからず。若し偉大なる先覺ありて、この大事勢が言はんと欲して言ふ能はざるところを國民に宣傳するあらんか。國民の心は、譬へば

堰かれたる水の堰を開かれたるが如く、滔々たる勢を以て、その進むべきところに流れ行かん。我輩は一日千秋の思をなして、日本國民將來の覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して已む能はざるなり。

經世憂國の士

大義名分
權謀術數

横道

陋見

然れども、我輩姑く明治維新時代に立ち返り、當時の經世憂國の士が自ら任じたるところを見る時は、その中になほ我が國民が今日の覺悟として可なるものあるを發見せずんばならず。彼等は、大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を説破し、討伐し、剿誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。その元氣の壯なる、人をして覺えず奮起せしむるものあり。この元氣とこの覺悟とありしが故に、維新の改革は成就して、鎖港攘夷の陋見は打破せられたるなり。維新以來日本が駁々として進歩し、今日の如く力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とのありしが故なり。

我輩は日本人に種々の缺點あるを知る。日本人はなほ幾分かの修練と困難とを經過せざれば、決して大國民となる能はざるを

世界に於て、大義名分のために熱狂し、忠誠のために一身を抛つこと土芥も啻ならざる國民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。

日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは、道德上の教訓にはあらざるか。

薰化

知る。然れども、世界に於て、大義名分のために熱狂し、忠誠のために一身を抛つこと土芥も啻ならざる國民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極、或は輕率の舉動に出で、大事を誤る同胞なきを必せずと雖も、身を殺して仁を成すに於て、極めて敏速に、死して悔なきこと、日本人の如きは、世界國民中多くあらざるところなり。日本人は道德義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰か然らずといふものあらん。

果して然らば、日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは、道德上の教訓にはあらざるか。日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私慾の汜濫を排除する一大任務を有し居るにはあらざるか。日本が開闢以來絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔美麗なる風土山川に薰化せられ、君臣父子夫婦朋友の道正しく、大體より見て殆ど理想的國家を經營し來りたるも

世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨す。

の、他日大いに世界の腐敗を掃蕩するがためにはあらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨するは、日本がその特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與にはあらざるか。我輩は日本が天地大道の化身となりて、世界萬國を警醒する大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て、欣喜措く能はざるなり。

瀧澤馬琴
江戸時代の小説家

名は解、曲亭馬琴と號す
嘉永元年(二五〇)歿、年八十二
古の人謂はずや禍福は糾へる繩の如し、人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。

二一 芳流閣

瀧澤馬琴

古の人謂はずや禍福は糾へる繩の如し、人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。それは福の倚る處、はた禍の伏する處、彼にあれば此にあり、とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐れむべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身に傳へつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、はるく、滯我へも

滯我
下總國(茨城縣)猿島郡古河町。

たらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刃は舊の物ならで、我が身を劈く譬とぞなりし、憾をこゝに釋くよしもなく、事急にして、意外にあり。僅かに當座の辱めを、避けばやと思ふばかりに、あまたの圍を殺開きて、芳流閣の屋の上に、攀ち上れども、左右に、脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を究めたる、心のうちは、いかなりけん、想像るだにいと痛まし。

さればまた犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋かれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよとて、なまじひに擇み出だされつ。他の憂を身の面目に、今更用ゐられん事、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、燄熱

足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、燄熱

を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、流は名に負ふ坂東太郎。

熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、流は名に



(筆自琴馬) 圖下畫挿傳犬八

は目柴翳す由もなく、迭に隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる形勢、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の窺ふに似たりけり。

成氏
古河公方足利成氏
横堀史在村
成氏の老臣。

廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし、床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げた。また閣の東西には、身甲したる許多の士卒、槍、長刀を見かし、或は箭を負ひ、弓杖突き立て、組ん

墨氏
墨翟、周の人。
魯般
公輸般、魯の人。

で落ちなば撃ち留めんとて、項を反らしてこれを觀る。加之外面は、綿連として遙かなる、河水繞りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずとも羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば、事みな休まん、脱れはてじと見えたりけり。

膳臣巴提便

欽明天皇の七年
(二二〇)百濟に使
した時、虎穴に
入つて虎を刺殺
した勇者。

富田三郎
和田義盛の臣、
源實朝の面前で
大鹿の角を二本
重ねて一度に折
つた勇士。

その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひ登らんとせし兵等を斬り落しつる後は、絶えて近づく者なきに、今唯獨り登り來ぬるは、世に覺えある力士ならん。這奴はこれ、膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか、また富田三郎が、鹿の角を裂く力あるか。遮莫一箇の敵なり、引組んで刺迭へ、死するに難き事やはある。よき敵にこそござんなれ、目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推し拭ひ、高瀬の如き方桴に、立つたるまゝに寄するを待てば、見八もまた思ふ

太刀風。

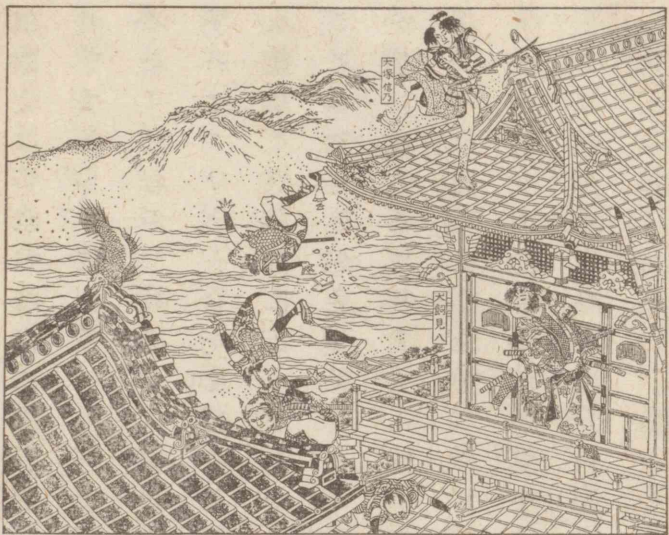
一上一下。

虚々實々。

やう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても
 搦めかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み
 出だされし甲斐もなし。搦め捕るとも、撃たるとも、勝負を一時
 に決せんものをと、思ひにければちつとも擬議せず、御詫ごふと呼
 び掛けて、拿たる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進
 み登りて、組まんとすれども寄せつけず。心得たりと、鋭き太刀風
 に、撃つを發石と受け留めて、拂へば透かさず、數刀尖を、支へて流す
 一上一下、這る薨を踏み駐めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣ら
 ぬ手練の働炭より、落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負
 をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬きも
 せず氣を籠めて、見る目もいと遙かなる。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、
 思へば勇氣彌倍して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音

兩虎深山に挑む
 時、錚然として
 風發り、二龍青
 潭に闘ふ時、沛
 然として雲起
 る。



掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に闘ふ時、沛然
 として雲起るも、かくぞあるべき、
 春ならば峯の霞か、夏なれば夕の
 虹か、と見るばかりなる、いと高閣
 の棟にして、死を争ひし爲體、世に
 未曾有の晴業なれば、見八は被籠
 の鎖肱當のはづれを、裏かくまで
 に切り裂かれしかど、太刀を抜か
 ず。信乃は刀の刃も續かて、初に
 浅痕を負ひしより、次第に疼みを
 覺ゆれども、足場を計りて、搥まず
 去らず、疊みかけて、撃つ太刀を見
 八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと掛けたる聲と

覆車の米苞。

底には入らで程もよし。

ともに、眉間を望みて礮と打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鏢際より折れて遙かに飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引着けて、迭に利腕しかと拿り、振ぢ倒さんと曳聲合はして、揉みつ揉まるゝ力足、此彼ひとしく踏み込らして、河邊の方へころ／＼と、身を輾ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。勾配険しき棧閣に、削り成したる蕘の勢、止るべくもあらざめれど、迭に拿つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打累りつゝ、挫と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜丁と張り斷りて、射る矢の如き早河の眞中へ吐き出だされつ。しかも追風と虚潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

〔南總里見八犬傳〕
龍澤馬琴
白下。三二

芥川龍之介

大正時代の小説家

東京の人

昭和二年(二五七)

歿、年三十六

華山

渡邊登。畫家、

蘭學者。田原侯

三宅氏の家臣

で、家老に上つ

た。天保十二年

(二五〇)自刃、年

四十九

書いてある事が、自分の心持とびつたり來ない。

二二 心機一轉

芥川龍之介

華山が歸つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつぐべく、何時ものやうに机に向つた。先を書きつゞける前に、昨日書いたところを一通り讀み返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで彼は今日も、細い行の間へ一面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり讀み返した。

すると、何故か書いてある事が、自分の心持とびつたり來ない。

字と字との間に不純な雑音が潜んでゐて、それが全體の調和を到るところで破つてゐる。彼は最初それを、彼の癩の昂つてゐるか、らだと解釋した。

「今の己の心持が悪いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れるところまで、書き切つてゐる筈だから。」

さう思つて、彼はもう一度讀み返した。が、調子の狂つてゐることは、前と一向變りがない。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前は、どうだらう？」

徒らに粗雑な文句ばかりが、糅然として散らかつてゐる。

彼はその前に書いたところへ眼を通した。すると、これもまた徒らに粗雑な文句ばかりが、糅然として散らかつてゐる。彼は更にその前を讀んだ。さうしてまたその前の前を讀んだ。

讀むに随つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。何等の映像をも與へない敘景、何等の感激をも含まない詠歎、何等の理路をも辿らない論辯。

しかし讀むに随つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには、何等の映像をも與へない敘景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうしてまた、何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分の原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは初から書き直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌ま／＼しさうに原稿を向うへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣

になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き、南柯、夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、墓の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具



瀧 澤 馬 琴

端溪 支那の有名な硯材の産地の名。またその石を以て作られた硯のこと。

暗い影を投げる。暗い影を投げるやうな――彼自身の實力が、根本的に怪しいやうな――

忌まはしい不安を禁ずることが出来ない。
本朝に比倫を絶した大作。

忌まはしい不安を禁ずることが出来ない。
「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり、事によると、人並に己惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。

彼は同時代の屑屑たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。

遼東の豕
彼の強大な「我」は、「悟り」と「諦め」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

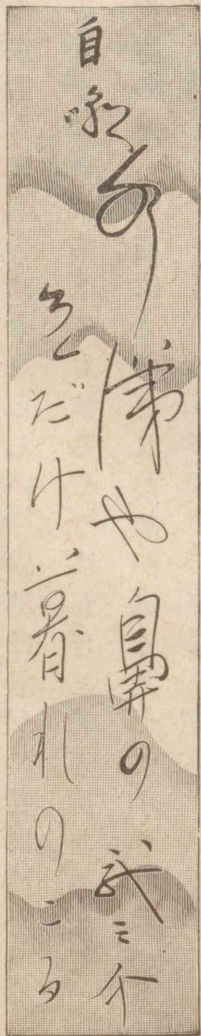
彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに、また同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことを、どうして安々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は、「悟り」と「諦め」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひつゞけた。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひつゞけた。もしこの時、彼の後の襖がけたましく開け放されなかつたら、さうして「お祖父様、唯今」といふ聲と共に、柔かい小さな手

自嘲
水滸や鼻の先だけ暮れのこる
龍之介

憂鬱な気分の中に、いつまでも鎖されてゐたことであらう。



龍之介の筆蹟

が彼の頸へ抱きつかなくなつたら、彼は恐らくこの憂鬱な気分の中に、いつまでも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが有つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ、勢よく飛び上つた。

「お祖父様、唯今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」
この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦が輝いた。

茶の間の方では、痛高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が、賑かに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から倅の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはり、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう言ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり現れたりする。

宗伯
松前侯の藩醫。

考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり現れたりする。

消えたり現れたりする。

ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう、噴き出した。が、笑の中ですぐまた語を繼ぎながら、

「それから？」

「それから……え、と……痛癢を起しちやいけませんッて。」

「おや、それきりかい？」

「まだあるの。」

太郎はかう言つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら、自分もまた笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小さな靨をよせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐むべ

眼を細くして、白い齒を出して、小さな靨を

よせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。幸福の意識に溺れながら、

き顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんなことを考へた。さうしてそれが、更にまた彼の心を擦つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね、いろんな事があるの。」

「どんな事が？」

「えゝと……お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりませんから？」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいって。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず、眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、よく辛抱なさいって。」

「誰がそんな事を言つたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯いたづらさうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。さうさな、今日は御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音様がさう言つたの。」

かう言ふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しさに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな

斷然として首を振つた太郎は。

嚴肅な何物かが刹那に閃いた。

手を叩きながら、轉げるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。彼の唇には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に彼の眼には、いつか涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或はまた母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ處ではない。この時、この孫の口から、かういふのを聞いたのが、不思議なのである。

「觀音様がさう言つたか。勉強しろ。癩癩を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら子供のやうになづいた。

〔戯作三昧〕

二三 競が事

〔平家物語〕

明くる十六日、高倉の宮の御謀叛起させ給ひて、三井寺へ落ちさ

この一章では、平家物語の語り本に據つて原文特有の句讀法を參酌した。明くる十六日 治承四年(一一八四)

五月、高倉の宮

以仁王、後白河天皇第二皇子。治承四年薨。

京中の騒動なめならず。

年頃日頃もあればこそありけめ。

宗盛

前出(一七頁)

人の世にあればとて、すいゝにいふまじき事をいひ、すまじき事をするは、よく思慮あるべき事なり。

伊豆守

前出(一七頁)

せ給ふぞやと申すほどこそありけれ、京中の騒動なめならず。抑もこの源三位入道頼政は、年頃日頃もあればこそありけめ、今年いかなる心にて謀叛をば起されけるぞといふに、平家の次男宗盛卿の、不思議の事をのみし給ひけるに依つてなり。されば人の世たのめにあればとて、すいゝにいふまじき事をいひ、すまじき事をするは、よく思慮あるべき事なり。たとへばその頃、三位入道の嫡子、伊豆守仲綱のもとに、九重に聞えたる名馬あり。鹿毛なる馬のなま雙なき逸物いそぶつ乗り、走り、心むけ、世にあるべしとも覺えず。名をば木の下とぞいはれける。

宗盛卿使者を立てて、聞え候名馬を賜はつて見候はばやと、宣ひ遣はされたりければ、伊豆守の返事には、さる馬をば持つて候ひしを、この程あまりに乗り疲らかして候程に、暫く勞はらせむがために、田舎へ遣はして候と申されければ、さらんには力及ばずとて、そ

あつばれその馬は、一昨日も候ひし。昨日も見えて候。今朝も庭乗し候ひつる。

さては惜しむごさんなれ、にくし、乞へ。

六波羅
京都六波羅、平家の邸宅のある所。

の後は沙汰なかりけるが、多く並みゐたりける平家の侍ども、あつばれその馬は一昨日も候ひし。「昨日も見えて候」今朝も庭乗し候ひつるなど、口々に申しければ、さては惜しむごさんなれ、にくし、乞へ」とて、侍して馳せさせ、文などして、一時が中に五六度七八度など乞はれければ、三位入道これを聞き、伊豆守に向つて宣ひけるは、「たとひ金を以てまるめたる馬なりとも、さほど人の乞はうずるに、惜しむべきやうやある。その馬速かに、六波羅へつかはせよ」とこそ宣ひけれ。伊豆守力及ばず、一首の歌を書き添へて、六波羅へつかはさる。

こひしくば來ても見よかし身に添ふる

かげをばいかが放ちやるべき

宗盛卿、まづ歌の返事をばしたまはて、「あつばれ馬や、馬はまことによい馬でありけり。されどもあまりに惜しみつるが憎きに、主

が名乗を金焼にせよ」とて、仲綱といふ金焼して、既にこそ立てられけれ。客人來りて、聞え候名馬を見候はばやと申しければ、その仲綱めに鞍おけ、引き出せ、乗れ、うてはれ、なんとぞ宣ひける。伊豆守この由を傳へ聞き給ひて、身に代へて思ふ馬なれども、權威について取らるゝさへあるに、剩へ天下の笑はれ種と、ならんずる事こそやすからねと、大きに憤られければ、三位入道宣ひけるは、「なでふ事のあるべきと思ひ侮つて、平家の人どもが、斯様のしれごとをするにこそあんなれ。その儀ならば命生きても何にかはせむ、便宜を窺ふにこそあらめ」と宣へども、私には思ひも立たれず、高倉宮を勧め申されけるとぞ、後には聞えし。

これにつきても天下の人、小松の大臣の事をぞ偲び申しける。或時大臣参内の序に、中宮の御方へ参らせ給ふに、八尺ばかりありける蛇の、大臣の指貫の左の輪を這ひ廻りけるを、重盛騒がば女房

小松の大臣
平重盛。清盛の長男。治承三年(一一九一)を歿、年四十二。
八尺
約二百四十七センチ。

中宮
高倉天皇の中宮
徳子。後の建禮
門院。平清盛の
女。

六位
六位藏人。

弓場殿
校書殿。(この中
に藏人所、右兵
衛陣、校書所な
どがある。)この
殿の東北に弓場
がある。



調馬圖 菊池契月筆

たちも騒ぎ、中宮も驚かせ給ひなんずとおぼしめし、左の手にて尾をおさへ、右の手にて頭を取つて、直衣の袖の中へ引入れ、ちつとも騒がず、つい立つて、六位や候、六位や候と召されければ、伊豆守仲綱、その時は未だ、衛府の藏人にて候はれけるが、仲綱と名乗つて参られたるに、この蛇をたぶ。賜はつて、弓場殿を経て、殿上の小庭に出てつゝ、御倉の小舎人を招いて、これ賜はれといはれければ、大きに頭を振つて逃げ去りぬ。伊豆守力及ばず、わが郎等の競を召して、これをたぶ。賜はつて捨ててけり。そのあしたに小松殿より、よ

昨日のふるまひこそ、優にやさしう候ひつれ。

還城樂

とぐろを巻き鎌首を立てた彫物の蛇に箔を置きたるを、手に取りつ置きつ喜びて舞ふ支那樂の名。

ひたかぶと三百餘騎
年頃の侍。

相傳の主。

い馬に鞍おいて、伊豆守のもとへ遣はすとて、さても昨日のふるまひこそ、優にやさしう候ひつれ。これは乗一の馬で候ぞとて遣はさる。伊豆守大臣の御返事なれば、御馬畏つて賜はり候ひぬ。さても昨日の御振舞は還城樂にこそ似て候ひしかとぞ申されける。いかなれば、小松殿はかやうに優なるためしもおはせしぞかし、この宗盛卿はさこそなからめ、人の惜しむ馬乞ひ取つて、剩へ天下の大事に及びぬることうたてけれ。

さる程に同じき十六日の夜に入つて、源三位入道頼政、嫡子伊豆守仲綱、次男源大夫判官兼綱、六條藏人仲家、その子藏人太郎仲光、以下ひたかぶと三百餘騎、館に火をかけ焼き上げて、三井寺へこそ参られけれ。こゝに三位入道の年頃の侍に、渡邊、源三競の瀧口といふ者あり。馳せおくれて止まりたりけるを、六波羅へ召して、など汝は相傳の主三位入道が供をばせて、止まつたるぞと宣へば、競畏

自然の事も候はば、眞先かけて命を奉らうとこそ存ぜしか。

先途後榮を存じて、當家についで奉公せむとや思ふ。

朝より夕に及ぶまで、「競はあるか」「候ふ」とある候ふとて伺候す。

つて申しけるは、日頃は自然の事も候はば、眞先かけて命を奉らうとこそ存ぜしか、今度はいかゞ候ひつるやらん、かうとも知らせられざりつる間、止まつて候と申す。宗盛卿、これにもまた兼參けんさんのものぞかし。先途後榮を存じて、當家について奉公せむとや思ふ。また朝敵頼政法師に同心せむとや思ふ。ありのまゝに申せ、とこそ宣ひけれ。競涙をはらくと流いて、たとひ相傳のよしみ候とも、いかんか朝敵となれる人に同心をば仕り候べき。たゞ殿中に奉公致さうずるにて候と申しければ、大將、さらば奉公せよ。頼政法師がしけむ恩には、ちつとも劣るまじきぞとて入り給ひぬ。朝あしたより夕ゆふに及ぶまで、競はあるか「候ふ」「あるか」「候ふ」とて伺候す。

日もやうく暮れければ、大將出でられたり。競畏つて申しけるは、まことや三位入道は、三井寺にと聞え候。定めて夜討なんどもや向はれ候はんずらん。三位入道の一類、渡邊黨、さては三井

心にくうも候はず。

寺法師にてぞ候はんずらん。心にくうも候はず、罷り向つて、擇り討ちなども仕るべきに、さる馬を持つて候ひしを、このほど親しい奴めに盗まれて候。御馬一疋下し預り候はばやと申しければ、大將、尤もさるべしとて、白茸毛なる馬の、南鐐とて祕藏せられたりけるに、よい鞍おいて競にたぶ。賜はつて宿所に歸り、はや日の暮れよかし、三井寺へ馳せ參り、入道殿のまつさきかけて、討死せん」とぞ申しける。

日もやうく暮れければ、妻子どもをばかしこ爰こゝに立ち忍ばせて、三井寺へと出で立ちける、心の中こそ無慙なれ。平紋ひらごもの狩衣の菊綴おほらかにしたるに、重代の着長、緋緘の鎧着て、星白兜の緒をしめ、いかものづくりの太刀を佩き、二十四さいたる大中黒の矢負ひ、瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽ではいだりける、的矢一手ぞさし添へたる。滋藤の弓持つて、南鐐に打乗り、乗替一騎うち具し、舍人

「競はあるか」候はず

勝れたる大力の剛の者、矢つぎばやの手きゝにてありければ。

無下。

男に、持楯脇挟ませ、屋形に火かけ焼き上げて、三井寺へこそ馳せたりけれ。六波羅には、競が屋形より火出で來たりとて、犇めきけり。宗盛卿いそぎ出で、競はあるか候はずと申す。「すは奴めを手延びにして、たばかられぬるは。あれ追つ懸けて討て」とのたまへども、競は勝れたる大力の剛の者、矢つぎばやの手きゝにてありければ、「二十四さいたる矢では、まづ二十四人は射殺されなんぞ。音なせそ」とて、進む者こそなかりけれ。

唯今しも三井寺には、渡邊、黨寄りあひて、競が沙汰ありけり。「いかにもしてこの競瀧口をば、召具せられ候はんずるものを」と、口々に申されければ、三位入道競が心を能く知つて宣ひけるは、「無下にその者捕へ搦められはせじ。入道に志深き者なれば、見よ、唯今參らうずるぞ」と宣ひも果てぬに、競つと参りたり。「さればこそ」とぞ宣ひける。競畏つて申しけるは、「伊豆守殿の木の下がかはりに、六

波羅の南鐐をこそ取つて参つて候へ。參らせ候はん」とて奉る。伊豆守殿斜ならず悦び給ひて、やがて尾髪を切り、金焼をして、その夜六波羅へ遣はさる。夜半ばかりに、門の内へ追ひ入れたりければ、厩に入つて、馬どもと嚙ひ合ひければ、その時舍人驚きあひ、南鐐が参つて候と申す。宗盛卿急ぎ出でて見給ふに、昔は南鐐今は平宗盛入道といふ金焼をこそしたりけれ。大將につくい競めを、斬つて捨つべかりけるものを、手延びにして謀られぬることこそ安からね。今度三井寺へ寄せたらんずる人々は、如何にもして競めを生捕にせよ、鋸で首斬らんと、躍りあがり怒られけれども、南鐐が尾髪も生ひず、金焼もまた失せざりけり。

尾上柴舟

歌人 國文學者
文學博士
東京女子高等師範學校教授
名は八郎
岡山縣の人
明治九年生

二四 秋に動く歌ごころ 尾上 柴舟

秋の心を動かすものは風である。「秋來ぬと目にはさやかにみえねども風の音にぞおどろかれぬるは眞である。風があつて秋がはじまり、秋が更けて風が寒い。

秋風はずしくなりぬ馬なめて

いざ野にゆかな萩の花見に

大火西に流れたあとの早涼に乗じて、おもふどち馬を野に馳せよう。風は行手の盛りの萩を揺りこぼしつゝ、吹くであらう。

わがせこが衣の裾を吹きかへし

うらめづらしき秋のはつかぜ

夫は庭に立つてゐる簾の中からそれを見送つてゐる妻は、男の単衣の裾が、朝涼の風に翻へるを認めた。それを序として、心地の

爽かさを歌ひ出した。

伏見山松のかげより見わたせば

あくる田の面に秋風ぞふく (俊成)

「秋風ぞふく」で留めた歌は多い。「ふりにけるながらの橋を來て見れば蘆の枯葉に秋風ぞふく」夕されば門田のいなばおとづれて蘆のまろ屋に秋風ぞふくなど、擧げ來たれば限りもない。伏見山に上つて見わたす。松の疎らな林間から稻田の廣がりが見える。穂の出たところもあり、出ぬところもある。それも末は薄霧にほかされてゐる。と、冷かさを含んだ風が吹きわたるや、黄を帯びた波がうねり去りうねり來る。その爽かな響が、この山の上までも聞えるやうである。今日の電車汽車の往復、工場の煙、新様の住宅は、この作者の思ひもかけぬところである。たゞ淀の大河、巨椋の池が、昔のあとを見せてゐるのみである。

伏見山

京都市伏見の東方。南方巨椋池、宇治川を臨む。

俊成

トシナリともシ
ンゼイともい
ふ。姓は藤原、
千載集の撰者。
元久元年(八四
四)年九十一。

巨椋の池

京都府久世郡にある。昔は淀川に通じてゐた。今は池の一部に大和街道を通してゐる。

さびえの橋

兵庫の北、湊川堤に接する入江にあつた。

玉もかへりて

年を経てにこりだにせぬ佐比江には玉藻かへりて今ぞすむべき

(王生忠琴、後撰集)

景樹

姓は香川、號は桂園。京都に住し、新歌風を唱へた。天保十四年(三五三)歿、年七十六。

住吉區住吉

今の大阪市住吉區住吉

躬恆

前出(七二夏)

秋風のさむきゆふべに津の國の

さびえの橋をわたりけるかな (景樹)

昔の人が「玉もかへりて今ぞすむべき」と歌つた銚江の橋を渡つた人がある。それが作者であるか、他人であるかは問はずともいゝ。その人が寒くなりつゝある風を袂に受けて、かう歌つた。ただそれのみである、何の技巧もない。たとへば薄墨一色の一幅の繪である。その中にやゝ濃くあらはれてゐるのが、橋と渡る人である。淡々の味は味解しない人の厭ふところ、この味は、この心は、初心初學のひと語り難い。

住の江の松を秋風吹くからに

聲うち添ふる沖つしら波 (躬恆)

風が烈しく吹く。住吉社頭の松の音が高い。それに次いで、沖の方でも、波の響が強くなつた。陸と海と相應じた音響が、一時に

秋草 (松村景文筆)



經信
姓は源。承德元年(七五七)歿。年八十二。

家持
奈良朝時代の歌人。旅人の子。延暦四年(四八五)歿。年五十七。

さへ

この歌の上にとゞろいてゐる。語の勢は急速でない。しかも聞えるものは颯々の音、滔々の響である。この一首は、躬恆の價を高くした。經信がこれに倣はうとして、沖つ風ふきにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波と歌つたが、巧みに過ぎて、これの自然なのに及び難い。

けさの朝け秋風さむし遠つ人

雁の來なかむ時近みかも (家持)

あけゆく朝の草木をわたる風が膚にさむく當る。いよ／＼雁の來る時節となつた。唐櫓の響に似た聲が、もうすぐ天邊に聞えるであらう。

白雲に羽うちかはしとぶ雁の

數さへみゆる秋の夜の月

いよ／＼雁が來た。天外を高く渡る。白雲が月光を受けなが

ら揺曳ユウエイしてゐる。雁の翼はそれと觸れるかに見える。月は更けるまゝにさやけさを増して銀のやうな光を大空に惜しみなく流してゐる。「數さへ見ゆる」にそれがよく現れてゐる。「影さへ見ゆる」といふ本もある。それも大まかでない。がこれには精細味がある。

ゆふづく夜心もしぬに白露の

おくこの庭にこほろぎなくも (湯原王)

夕べは心がしめくとする。それに一層を加へてこほろぎが鳴きはじめた。それは露が草葉にあまねく置きわたしたためである。秋が深くなつたためである。その情景をそのままにいふ、巧みをもとめずにいふ。句から句へと垂直に續いて行つて、一點のたるみも、緩みもない。

昨日こそ早苗とりしかいつのまに

湯原王
天智天皇の皇孫

いそししか

稻葉そよぎて秋風の吹く

早苗を植ゑてゐる初夏はまだ昨日と思つてゐるのに、はや稻葉がそよいで秋風が吹き出してゐる。まことに、いつのまにかうなつたのであらうか。驚かれるのは月日はやく過ぎることである。單純にものをいふところに懐かしさがある。「稻葉そよぎて」が、古本には「稻葉もそよに」となつてゐる。この方に一層古淡な趣がある。

風わたる浅茅が末の露にだに

やどりもはてぬよひの電 (有家)

電の如く早いものはない。風が過ぎると草の上の露は忽ち散る。その露の散る間だけでも、宵の電は待たずに消える。急駿な速度を述べること、この歌の如く巧みなのはあるまい。君がうゑし一むら薄蟲のねの

だに

有家
姓は藤原、新古今集の撰者

有輔
姓は御春。藤原
敏行の家人。

しげき野べともなりにけるかな (有輔)
人の死後、故邸の垣の外より見ると、庭には月の光がさしわたつてゐる。その光になびいてゐるのは、あまたの薄の葉末である。自分は以前こゝにゐたことがあつた。その頃、故人はこの庭にただ一むらの薄を植ゑた。それから時が廻つてまた秋の今夜になつた。蟲が繁く鳴く。その聲はむらだつ薄の中から起つてゐる。この蟲のこんなに繁く鳴くまで薄は茂つたのである。哀悼の語は殆ど一つもなく、たゞ「なり」にけるかなと歎息したところに、無限の悲愁が見える。音と調と、この類でこの上に出るものはあるまい。

川霧の麓をこめて立ちぬれば

空にぞ秋の山は見えける (深養父)

水から霧が上る。川向うの山は見えない。白茫茫の上に、山の

深養父
姓は清原。延喜
(二五六一—二五六二)延

長(五三—五九)
頃の人。

頂の紅葉したのがほつかりと浮かんでゐる。粗描ながら、情景の油然として湧き起る一幅の活畫である。これを翻案して「麓をば宇治の川霧たちこめて雲にみゆる朝日山かな」としたのは、氣韻がすてに下つてゐる。

ひさかたの月の桂も秋はなほ

紅葉すればや照りまさるらむ (忠岑)

月中に桂があるといふ、それも地上の木とおなじく、露が一度置けば紅葉するからであらうか、昨日と變つた光のあかさである。桂の紅葉は奇抜である。作者の才藻はこゝで見える。「秋はなほ」を「秋くれば」とした本もある。が、調子は「なほ」の方が輕快である。「春がすみたなびきにけりひさかたの月の桂も花や咲くらむ」といふ貫之の歌がある。同じ資料を春と秋とに使ひ分けたのはおもしろい。いはゆる同巧異曲といふべきであらう。

忠岑
前出(七三頁)

貫之
前出(七二頁)

高田早苗
貴族院議員
法學博士
前早稻田大學總
長
號は半峰
東京の人
萬延元年生

二五 ロンドンの二大記念

高田早苗

大正三年五月十二日。早く起きて、旅館の高い窓から朝のロンドン市を瞰下した。同時に今まで経験したことのない程の愉快を感じた。見よ、正面にはパーリメント、その右にはエストミンスター・アベール、この英國に於ける偉大なる記念の二大建築が相並んで我が前に空高く聳えてゐるではないか。

夢寐の間。
その久しい憧れの雄姿を、着いた

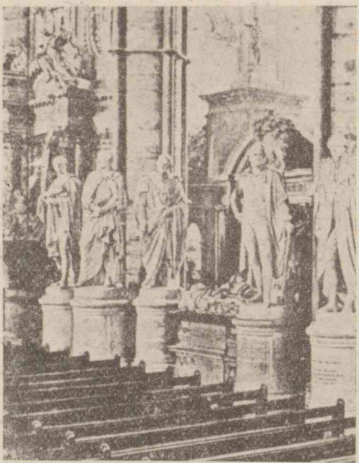
私は永らく英國の憲法や憲政史や一般歴史を研究してゐたので、世界に於ける國會の鼻祖であり、また模範でもある、この國のパーリメントのことは、殆ど夢寐の間も忘れることがなかつた。随つて、今度洋行して英國に行くからには、第一にそれを見ようと深く心に期してゐたのであつたが、その久しい憧れの雄姿を、着いた

た翌朝の、始めて見るロンドンの空に見出だしたのは、實に豫想外でもあり、また限りなき悦でもあつたのである。

翌朝の、始めて見るロンドンの空に見出だしたのは、實に豫想外でもあり、また限りなき悦でもあつたのである。エストミンスター・アベールに對しては、私は更に趣味の上の憧憬をも感じてゐた。私は英國史を讀み、英文學史を繙く毎に、この名

ワシントン・アービング
(1783-1859)
アメリカの文學者。

着後第一日のロンドンの空に於て、思ひ設けぬ對面をした。



エドモンド・バークの像

高い古刹に眠つてゐる英雄、豪傑、もしくは大詩人、大文豪に對して血を沸かしたことが幾度あつたか知れぬ。殊にワシントン・アービングのエストミンスター・アベール詣での高い文章には深く打たれて、折もあらば自分もいつか一度はと希つてゐたが、これまた、着後第一日のロンドンの空に於て、思ひ設けぬ對面をしたのである。我が悦は察せられるであらう。

私はその日取敢へず、この大寺院に參詣した。この寺で私が最も深い興味を以て見たのは、豫て聞いてゐたポーエツコーナーとステーツマンスコナーとであつた。前者は傑出した詩人を葬つた所、後者は有名な政治家を葬つた所である。元來英國でエストミンスター・アビーに葬るといふのは、國家がその政治家や文豪の生前の功勞を認めて、特にこの名譽の聖域に埋葬するといふことである。随つてこの寺に葬られるのは、つまりその人の偉大なることを證明する所以になるのである。



(—ベア・ータスニトスエは奥の端左) トンメリーバ

蹂躪

かやうなところから、この寺に詣でるまで、私は日本流の普通な考で、そこにはその人々の立派な墓標でも建ててある事と思つてゐたが、實際を見て驚いた。事實は、我々が歩く石疊の下にそれらの人達の遺骸が葬られてあるので、その上の石疊に、ほんのちよつと、誰々をこゝに葬るといふ事が彫り付けてあるに過ぎないのである。即ち私は知らず識らずその人々の墓の上を蹂躪してゐたのであつた。尤も、所々にはその文豪や政治家の名の彫刻されたのが見えるのもある。けれどもそれはちよつと氣がつかないので、學生時代の昔から最近まで、その人の著作を読み、或は傳記を讀んで、心から憧憬したところの人、或意味からいへば恩人でもあり、崇敬の標的であつたともいへる人達の遺骸の上を踏んでゐたのかと氣がつくと、知らぬ事ながら、まことに濟まぬやうな、物體ないやうな心地がしたのであつた。

崇敬の標的

英國の議會即ちパーリメントへは、三度ばかり行つて見た。一度は議事のない日で、幸に靜かにその内部を見せて貰ふことが出来た。

英國の議會は、一つの建物の内の、向つて右の方に貴族院があり、左の方に庶民院がある。由緒の古い建物で、不便極まることは勿論、その上議員全部が出席すれば、とても入り切れないといふほどの狭いものである。尤も投票の場合に議員を残らず驅り出すといふやうな事は、英國の議會にはめつたにない事かも知れぬが、普通の場合でも、政府黨または反對黨の首領たちがベンチに腰かけてゐるだけで、陣笠連は、大概立つてゐるといふ状態だといふことである。

英國の議會には演壇がない。議長の右の前席がトレジュアリー・ベンチと稱して政府黨首領の席、その左側がオツポジション・ベ

ンチと呼んで反對黨首領の席である。元來英國の議場は細長く出来てゐるが、その兩ベンチの間は實に狭い。で、政府の大臣も、反對黨の首領も、自席から自説を述べ、また反對者の説を攻撃するやうになつてゐる。我が國のやうに、議長席と演壇との左右に事々しく國務大臣と政府委員の席を設けるやうな事は素よりないのである。

さういふ次第であるから、その昔パーマー・ストーンが徹宵の大演説を試みたとか、グラッドストーンがアイルランド自治案に就いて説明の大演説をしたとかいふのも、我々には何か高い所から大見えを切つて、長廣舌を揮つたことのやうに思はれるが、事實はさういふ芝居掛つたことではなかつたらしい。そして議會の演説のことを「デベート」即ち討論といふが、その座席の工合から見ると、成程討論といふのがいかにもふさはしく思はれ、また態々演壇に上

パーマー・ストーン
(1784-1865)
グラッドストーン
(1809-1898)

るのではないから、自然議員が聞くに堪へぬやうな拙い長演説をする機会が少く、これなら大分議事が捗取るであらうと、心竊かに思つたのであつた。

私のロンドンに關する思出は雲の如くに多い。こゝには文化的の意義と趣味とに富めるたゞ二鎖を拾つたに過ぎぬ。

(「半峯昔ばなし」)

二六 都市美論

佐藤 功 一(據)

海外に遊んだ人は、多く新しい市街の美を説かうとはしないで、専ら古都市の美を説くことを常とする。同じ傾向から、國內に於てもまた、人々は第一に奈良、京都の美を擧げる。私はこのことに對して決して異議を挿むものではない。しかしながら、これらの古都市が旅行者の心を惹く原因は、主として歴史的回想であつて、

佐藤功一
工學博士
早稻田大學教授
栃木縣の人
明治十一年生

古都市が旅行者の心を惹く原因

は、主として歴史的回想であつて、その一般施設の合理性や、立體の集合やから來る直觀的の美ではない。故に一般都市美を論ずるに當つて、我々はまづ古都市の美が特殊の範疇に屬するものであることを心にとめて置かねばならぬ。例へば、京都の美の如きは、歴史的の背景を取去るならば、殆ど無價値で、單なる田舎景色の集合に過ぎぬものとなるであらう。周圍の山々の美しさを説く人もあらうが、あの位の風景は到る所に在る。俯觀の美はないでもないが、一方に於ておのづから氣宇の宏大を缺く憾みがある。朝鮮の京城がまたさうであるが、周圍の山々は京都より遙かに美しい。

封建時代の都市は、發生上シチイ・クラウンに屬するもので、中央に高く群を抜いて立つた宮城があり、それを核心として、その周圍に聚落の群つてゐるのが多い。歐洲の古いカセドラル・タウンに於ては、その中央クラウンは、大寺がこれを形造つてゐる。

封建時代の都市は、發生上シチイ・クラウンに屬する。

最も早く發達した北歐の商業都市ニールランド地方の都市には、その核心として市廳が高く聳えてゐた。これは中世紀の都市の獨立と殷富とを反映するもので、その市廳に附屬せしめて鐘塔を建つることは憲法に依つて與へられた重要な市民の權利であつた。

これらの市廳は都市の中央廣場に面して立ち、廣場の周圍には、取引所、銀行、商工會議所、商業組合等の建物が並び立つてゐた。そして廣場は市場に用ゐられて、謂はゆるシギツク・センターを形造つてゐたのである。東京の丸の内附近を外國式にシギツク・センターといふ人もあるが、東京



(ノラミ國伊)市都の洲歐たし達發に心中を院寺

にシギツク・センターはない。宮城の周圍に諸官廳が立ち並んで

はゐるが、それは帝都としての中央區域であつて、東京市民のシギツク・センターではない。しかしながら大東京の偉觀は、とにかくこゝに集中せられてゐる。殊に馬場先門からの宮城の眺、左に二重橋、右に本丸の櫓を望んで、その間に連なつた森の茂みの上に碧瓦の隠見する景觀の美は、誰しも口にするところである。

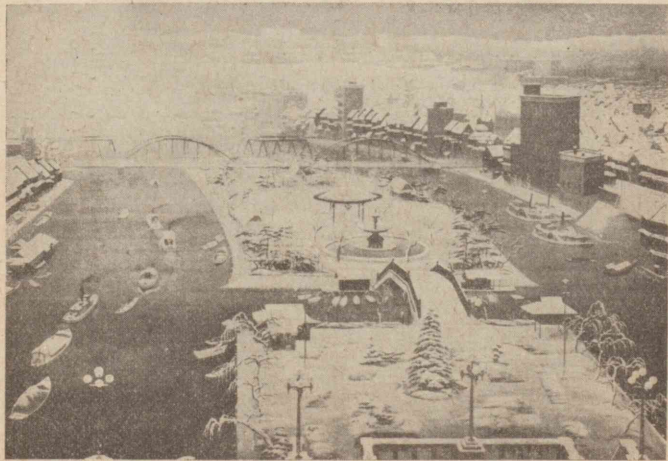


森の茂みの上に
碧瓦の隠見する
景觀の美

大阪市の都市
美

る。北濱から難波橋を渡りながら見る左右の眺は、またなく美し

いものである。左手の廣場の水に近く、コンクリートで平たく固めた築堤の上をば、曳舟の綱を肩にした船頭が通り、生垣を隔てた低い樹木の向う、砂地の綺麗な運動場には、子供が無邪氣に遊んでゐる。こゝは洪水の折には水に漬かつても、差支のないやうに設計されて居り、そして緑の木立を通して、一段高まつた所には、赤煉瓦の公會堂が立ち、その背後には白い圖書館が立ち、それからスカイラインを破つて市廳舎の塔が高く聳えてゐるが、これらは悉く人工を以て作り上げられた線の變化と立體の集合とから



(筆村遙田池) 園公島の中の雪

朝の靄によく、
晝の光によく、
夜の灯によい。

都市の眞の美
は、その隅々ま
で、凡て人間の

成立つた美である。また橋の右手に低く突き出た島の尖端にも捨て難い趣があり、難波橋がまた相應に意匠を凝らされたものである。無論建築的デテールに就いては多少の申分もあるが、とにかくこれこそ眞に都市の美といふべきものである。朝の靄によく、晝の光によく、夜の灯によい。洵に世界に於ける都市の美觀の一つである。私はこの全體のプランを立てた技術家の手腕に敬服する。そこには何等の歴史的回想もなく、何等の傳説をも容れずに、自由の計畫が表現されてゐる。また、河や地勢を利用してはゐるが、自然の姿そのままから來る美と、これに伴なふ聯想とを主としてゐるのではない。

西洋に「田舎は神これを作り、都市は人これを作る」といふ諺がある。都市の眞の美は、その隅々まで、凡て人間の知識と人間の意志とによつて、有機的に作り上げられたものでなければならぬ。勿

知識と人間の意志によつて、有機的に作り上げられたものでなければならぬ。
反映の美。

論、公園や、逍遙道や、一般住宅は、寧ろ天然物を多く取入れて、不定形に作ることを要する。且つその方が、定形的に作られた商業街と對比して、反映の美をなす所以ともなる。しかしながら、商業地の街衢に街路樹などの天然物をあしらふのは、たゞ餘りに引締められた建築觀を柔らげるために點景として添へられるだけのもので、私は寧ろ或街衢には、何等の天然物をも入るゝことなく、幾何學的堆體の集團のみに依つて特殊の美をなさしむる部分の存在することを希望するものである。

歐洲の都市にも、パリを別として、住宅地域の外に街路樹のある所は極めて少い。まして我が東京の市街のやうに比較的狭い街路に樹木を植ゑようとする所は、殆どないといつてよい。概して、西洋の諸都市では、住宅地域には街路樹を植ゑ、商業地域には植ゑぬやうになつてゐるのに、如何なる故か、日本のは全くこれと反對

である。

それから都市に必要なものは廣場である。古代の都市に於ては、市民は主要建築物を以て圍まれた中心廣場に出で、神殿に詣で、ニュースを交換し、その日の事務を處理し、取引を濟まし、市政演説を聞き、各種の競争をなし、入浴に身心の疲勞を一掃してからは、エキセデレに腰をおろして街巷を眺め、名士の立像や美しき記念柱などの間を逍遙して、その日／＼の全體をそこで送るといふやうに、謂はゆるフォーラム生活を送つたものである。中世紀から文藝復興期の商業都市に於ては、フォーラムがピヤツツアや市場やに代つた。そしてそれらの周圍がどんなに美しい建物で取圍まれてゐたかは、エニスのピヤツツアやブラッセルの市場が、今もなほ昔のまゝに物語つてゐる。現今に於ても、地方の小都市はなほこの計畫に従つて廣場を設けてゐるが、大都市に於ては、その活動

エキセデレ
露天の腰掛。

フォーラム
民衆集會の廣場。
ピヤツツア
歩廊廣場

の複雑なことが到底その設置を許さなくなつて來た。しかしながら大體的に見て、都市の中心はこれに存するので、都市の状態によつては、中央の大中心地の外に或數の小中心を置き、その間に主従の關係をつけて、一般計畫の上にも、美觀の上にも、立派な統一をつけることになつてゐるのである。

跳噴の餘勢、散じては霧に虹を宿し、球と凝つては盤に落ち、蓄水の面を打ち、溢れては滑かに盤縁を嘗めて第二の水盤に注ぐ。

中心地の廣場に必要なものは水である。湛へられた清冽なる水ほど人の心を澄ますものはない。滑らかに動いてゐる水ほど人の心を柔らげるものはない。勢鋭く噴出する水ほど人の心に潑刺たる快感を起させるものはない。霧となつて飛散する水沫ほど人の心を軽くするものはない。跳噴の餘勢、散じては霧に虹を宿し、球と凝つては盤に落ちて蓄水の面を打ち、溢れては滑かに盤縁を嘗めて第二の水盤に注ぐ。この魔術的光景は、いかに幾何學的諧調を主としたこれらの廣場にふさはしいものであらうか。

噴泉の美は、これを木立の間に眺めるよりも、登や鋪石にたゞまれ

た大地に於て、石や煉瓦の建物を背景として観る方がよい。ロンドンからパリに移つて、その噴泉の美觀に驚く人は、ローマに遊んで更にその驚を深くするであらう。

我々が少年時代に讀んだ小學讀本には、東京の繁華を説いて「電線は蜘蛛の網の如く」と書いてあつた。

それは當時にあつては物珍しかつたに相違ないが、今日に於ては、甚だ笑ふべき話で、蜘蛛の網の電線と無作法に突立つてゐる電柱とは、非常に市民を苦しめ、市の美觀を傷

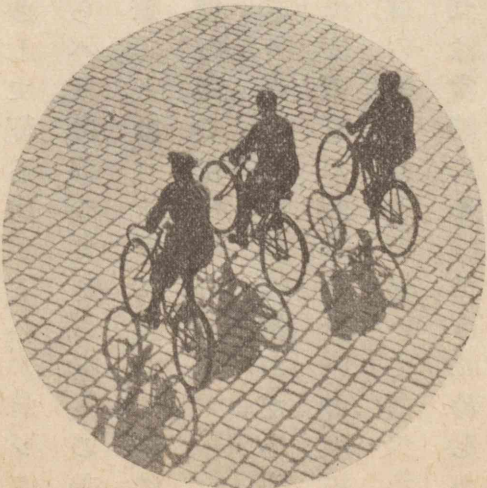


ロンドンのネソルン廣場

電車と街路面

人馬の影を垂直に路面に投影する。

つけてゐる。これは速かに地下線に改められねばならぬ。同時に各種の地下埋設物は、大暗渠の中に整理せられねばならぬ。また電車は凡て架空線を廢して地下線式に改める。若しそれが不可能ならば、或種のもので地下電車を改めて、他をば自動車を以て代辨せしめる。その上に、街路を走る自動車の凡てを、不愉快な音響を發せぬ電氣自動車にする。かうすることが出来れば、どんなに愉快なことであらう。またかく整理せられた路面を、土瀝アスファルト青アスを以て鋪裝し、夜間交通の少き時刻に於て清淨にこれを水洗し、晴天には鏡の如く人馬の影を垂直に路面に投映することが出来る。



路面投影圖

たならば、どんなに美しいことであらう。整理と清淨とは實に都市美觀の重要な要素である。

純建築的美觀と自然の風景との對立があつて、大都市の眞の面目が保たれる。

以上は概して純建築的美觀を主とした地區について述べたのであるが、これと相並んで自然の風致を豊かに與へた住宅地、公園、逍遙道、河畔等の對立があつて、大都市の眞の面目が始めて保たるべきであらう。住宅地は、商工業地域が平坦なるを要するのと違つて、多少の坂路を有する方が、却つて趣がある。そしてその街路に接しては、樹木や芝生や花壇やに意を用ゐることを要する。我が國の都市には公園が甚だ少い。そこには更に多くの大小公園が設けられねばならぬ。そして或種の大公園の間には、並木の見事な大道遙道の設けられる必要がある。河川の岸には、所々に當然荷上場が設けられるであらうが、その間にはこれらの混雜を隠すべき美しい河畔園が作られねばならぬ。

大都市美に工場
地の偉觀を伴な
はしむる必要。

純建築美を主とする地域と、自然の風趣を主とする地域との外に、大都市にはなほ蒸氣が盛んに立ちのぼり、大起重機が空高く動き、鐵槌の音が力強く響いて、熱火の光の赤く窓に映ずる工場地の偉觀が伴ふべき筈である。工場建築の美化は、近頃頻りに唱へられ、且つ實現せられつゝあるが、工場建築のみならず、更に地上の工作物一切の美化が行はれねばならぬ。都市全般の美化、これは實に現代的精神の強き顯れである。それにはいかなる部分にも、寸毫の不整頓、不合理、若しくは不快なる形態、不調和なる色彩なからしめ、都市全體をして一の立派な美術的建築物たらしめることを要する。

近代都市計畫の本場といはれた戦前のドイツの諸都市は、極端に美觀を重要視してゐた。それらの諸都市は、公共藝術や街衢の壯麗をば、恰も産業の資本の如くに見て、市の美觀を増すことを市

都市美の成立に
は市民の協力を
必要とする。

の發展上缺くべからざる事としてゐたといつてもよかつた。市民はまた演奏場、劇場、花園、美術館、博物館等に對する支出に不賛成を唱へぬのみならず、街路を飾り、銅像を建て、噴泉、時計塔等を増設することに悦んで協力した。随つて、それらの都市に見る橋梁、停車場、その他の公共建築物は、いかに小さなものでも、悉く甚大の注意を以て意匠せられた美術的產物であつた。そして彼等はかくすることに依つて、その人口が増殖し、商業が發展すると深く信じてゐたが、事實これによつて健全な移住者を増し、また觀光客を引きつけた。かくの如くにして都市は益、發展し、産業は益、盛んになり、地價は上騰し、市の収入は増加し、同時に他の一方に於て、市民の税率は低下した。市中は整頓してゆとりがつき、美しくなり、また演劇、演奏を始め、あらゆる高尚な娛樂機關が備つたために、それが觀光客を歡ばしめたのみならず、同時に市民に慰安を與へて、大い

都市の美觀の必要

にその教化に役立つた。ドイツの労働者の功程が一段抽んでて
みた原因の一つは、この慰安の機關と精神的娛樂との完備に基づ
いてゐたといはれる。

都市の美觀が市民の慰安の上にも、健康の上にも、精神的向上の
上にも、随つて風紀の上にも、經濟の上にも、いかほど重要なもの
であるかは、これによつて明らかに知られるであらう。

純正女子國語讀本 卷七終

文部省ノ御指示ニヨリ
昭和十三年六月一日ニ
部修正

純正女子國語讀本改訂版

各卷定價金六十錢

昭和十二年七月二十五日印
昭和十二年七月二十八日發
昭和十三年一月二十五日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十八日訂正再版發行



編纂者 五十嵐 力
發行者 山田 謙 吉
印刷者 五十嵐 良 晃

發行所 東京市牛込區原町二ノ四六

早稻田圖書出版社

振替東京一三六一五三番

關西特約販賣所

大阪市東區北久太
郎町四ノ一六

繪柳 原書店

